

第2【事業の状況】

1【業績等の概要】

業績

金融経済環境

当期の経済情勢を顧みますと、米国経済がサブプライム問題を主因とした個人消費の伸び悩み、住宅投資の落ち込み等から急速に減速したことに加えて、欧州でも景気の減速感が強まりつつあり、またアジアをはじめとする世界経済への波及も懸念されております。とりわけ年度後半は、サブプライム問題に起因して、証券化商品に係る流動性リスクに対する懸念が急激に高まる等、国際的な金融資本市場の混乱が拡大した結果、海外において巨額の損失とそれを補うための資本増強を公表する金融機関が相次ぎ、不安定な状況が続いております。日本経済につきましても、原油や原材料価格高騰の影響により企業業績が弱含みで推移する中、平成20年に入ってから、こうした金融資本市場の混乱や、急速に進んだ円高が実体経済に影響を与えており、景況感は悪化傾向にあります。

また、国内の株価につきましても、年度前半は底堅く推移しましたが、米国経済の減速傾向が一段と強まったこと等を背景に、年度後半は大幅に下落しました。長期金利につきましても、期初に一時的に上昇する局面がありましたが、米国金利の低下の影響等により、年度半ば以降は低下基調となり、期初を下回る水準で推移しました。

金融界におきましては、業務範囲の拡大等の規制緩和が進む中で、こうした世界的な景気減速懸念や金融資本市場の混乱もあり、内部管理態勢の一層の強化が求められております。当グループにおきましても、こうした環境変化を踏まえ、リスク管理等ガバナンスの更なる強化を図りつつ、競争上の優位性を確保し、収益力の一層の強化を図ることが重要な課題となっております。

当連結会計年度（平成19年4月1日～平成20年3月31日）の概況

(ア) 連結の範囲

当連結会計年度の連結の範囲につきましては、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項に記載しておりますとおり、連結子会社は37社、持分法適用関連会社は10社であります。

(イ) 業績の概要

当連結会計年度の業績は以下のとおりであります。

当連結会計年度（平成19年4月1日～平成20年3月31日）の連結損益状況

既述の金融経済環境のもと、みずほフィナンシャルグループにおいてもサブプライム問題を契機とする金融市場の混乱の影響を受けたことから、連結当期純利益は前連結会計年度比3,097億円減少し、3,112億円となりました。

当行の連結業績について見ますと、当連結会計年度の経常収益は、前連結会計年度比1,321億円増加し、1兆5,649億円となりました。主な内訳は、資金運用収益が、貸出金利回りの改善等により同1,448億円増加の9,269億円、役員取引等収益が同482億円減少の2,700億円、特定取引収益が同802億円増加の1,554億円、その他業務収益が同1,171億円減少の803億円等となっております。

経常費用は前連結会計年度比705億円増加の1兆2,765億円となりました。これは、その他経常費用が、株式等償却の減少等により同588億円減少の2,808億円となった一方で、資金調達費用が金利の上昇等により同1,309億円増加の2,725億円、営業経費が同41億円増加の6,025億円となったこと等によるものであります。これらにより、連結経常利益は同615億円増加の2,883億円となりました。

特別利益は、前連結会計年度比965億円減少の266億円、特別損失は、同97億円減少の72億円となった結果、税金等調整前当期純利益は同251億円減少の3,077億円となりました。

法人税、住民税及び事業税は前連結会計年度比34億円減少の116億円となり、法人税等調整額は、同268億円減少して458億円、少数株主利益は同27億円減少し201億円となりました。

以上の結果、連結当期純利益は前連結会計年度比80億円増加の2,301億円となりました。

当連結会計年度末（平成20年3月31日現在）の連結貸借対照表

[資産の部]

貸出金が前連結会計年度末比3,078億円減少の33兆6,979億円、支払承諾見返が同1,260億円減少の1兆4,658億円、有価証券が同1,164億円減少の14兆9,406億円となりましたが、債券貸借取引支払保証金が同5,416億円増加の3兆5,013億円、現金預け金が同4,154億円増加の3兆2,960億円、コールローン及び買入手形が同3,282億円増加の4兆6,682億円となったこと等により、資産の部合計は同1兆2,622億円増加の69兆6,988億円となりました。

[負債の部]

債券が前連結会計年度末比5,924億円減少の9,719億円、支払承諾が同1,260億円減少の1兆4,658億円となりましたが、預金が同1兆3,816億円増加の54兆4,359億円、譲渡性預金が同3,533億円増加の1兆3,273億円となったこと等により、負債の部合計は同1兆5,117億円増加の67兆3,285億円となりました。

[純資産の部]

純資産の部合計は前連結会計年度末比2,494億円減少の2兆3,702億円、1株当たり純資産額は263,525円25銭となりました。

自己資本比率

国内基準によるパーゼル 連結自己資本比率は前連結会計年度末比0.23ポイント上昇し11.97%、パーゼル単体自己資本比率は同0.42ポイント低下し11.70%となりました。

セグメントの状況

事業の種類別セグメントにつきましては、銀行業、証券業、その他事業に区分して記載しております。連結経常利益2,883億円は、銀行業で2,398億円、証券業で413億円、その他事業で82億円（但し、相殺消去額等控除前）の利益を計上したことによるものであります。なお、全セグメントの経常収益の合計額及び資産の金額の合計額に占める本邦の割合が90%を超えているため、所在地別セグメント情報は記載しておりません。また、海外経常収益が連結経常収益の10%未満のため、海外経常収益は記載しておりません。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度につきましては、営業活動によるキャッシュ・フローは、預金の増加等により前連結会計年度比5兆4,411億円増加の1,006億円となりました。投資活動によるキャッシュ・フローは、有価証券の取得等により同5兆4,813億円減少の3,574億円となりました。また、財務活動によるキャッシュ・フローは、同963億円減少の1,198億円となりました。なお、現金及び現金同等物の当連結会計年度末残高は、同3,771億円減少の1兆6,101億円となっております。

(1) 事業別収支

事業別の資金運用収支は、銀行業で6,513億円、証券業で6億円、その他事業で26億円、相殺消去後で合計6,544億円となりました。役務取引等収支は、銀行業で1,599億円、証券業で516億円、その他事業で97億円、相殺消去後で合計2,165億円となりました。特定取引収支は、銀行業で1,202億円、証券業で352億円、相殺消去後で合計1,554億円となりました。その他業務収支は、銀行業で129億円、証券業で4億円、その他事業で0億円、相殺消去後で合計132億円となりました。

種類	期別	銀行業	証券業	その他事業	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
資金運用収支	前連結会計年度	636,387	1,152	3,213	146	640,606
	当連結会計年度	651,323	661	2,671	209	654,447
うち資金運用収益	前連結会計年度	776,169	2,244	6,060	2,305	782,169
	当連結会計年度	919,625	3,847	6,171	2,664	926,980
うち資金調達費用	前連結会計年度	139,782	1,092	2,846	2,158	141,563
	当連結会計年度	268,301	3,185	3,499	2,454	272,532
役務取引等収支	前連結会計年度	179,260	63,074	22,734	4,542	260,527
	当連結会計年度	159,932	51,639	9,799	4,791	216,579
うち役務取引等収益	前連結会計年度	224,571	65,421	34,579	6,211	318,361
	当連結会計年度	208,591	53,723	12,996	5,247	270,064
うち役務取引等費用	前連結会計年度	45,311	2,346	11,845	1,669	57,834
	当連結会計年度	48,658	2,083	3,197	455	53,484
特定取引収支	前連結会計年度	31,327	42,685			74,013
	当連結会計年度	120,231	35,262		54	155,439
うち特定取引収益	前連結会計年度	32,515	42,685			75,200
	当連結会計年度	120,231	35,262		54	155,439
うち特定取引費用	前連結会計年度	1,187				1,187
	当連結会計年度					
その他業務収支	前連結会計年度	122,447	484	7,464	177	130,218
	当連結会計年度	12,958	456	74	41	13,297
うちその他業務収益	前連結会計年度	184,153	484	13,069	187	197,519
	当連結会計年度	79,853	490	93	41	80,395
うちその他業務費用	前連結会計年度	61,706		5,604	9	67,301
	当連結会計年度	66,894	34	168		67,098

(注) 1. 事業区分は、連結会社の主たる事業の内容により区分しております。主な事業の内容は以下の通りです。

銀行業.....銀行業

証券業.....証券業

その他事業...ファクタリング業、ベンチャーキャピタル業等

2. 「相殺消去額」には内部取引金額を記載しております。

3. 資金調達費用は金銭の信託運用見合費用を控除しております。

(2) 国内・海外別収支

国内の資金運用収支は6,381億円、海外の資金運用収支は154億円となり、資金運用収支の合計（相殺消去後）は6,544億円となりました。また、役務取引等収支は2,165億円、特定取引収支は1,554億円、その他業務収支は132億円となりました。

種類	期別	国内	海外	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
資金運用収支	前連結会計年度	627,143	12,844	618	640,606
	当連結会計年度	638,127	15,404	915	654,447
うち資金運用収益	前連結会計年度	782,169	21,889	21,889	782,169
	当連結会計年度	926,980	21,650	21,650	926,980
うち資金調達費用	前連結会計年度	155,026	9,044	22,507	141,563
	当連結会計年度	288,853	6,245	22,566	272,532
役務取引等収支	前連結会計年度	260,098	416	12	260,527
	当連結会計年度	216,160	422	3	216,579
うち役務取引等収益	前連結会計年度	318,471	539	649	318,361
	当連結会計年度	270,144	507	586	270,064
うち役務取引等費用	前連結会計年度	58,373	122	661	57,834
	当連結会計年度	53,983	84	583	53,484
特定取引収支	前連結会計年度	74,013			74,013
	当連結会計年度	155,439			155,439
うち特定取引収益	前連結会計年度	75,200			75,200
	当連結会計年度	155,439			155,439
うち特定取引費用	前連結会計年度	1,187			1,187
	当連結会計年度				
その他業務収支	前連結会計年度	130,234	16		130,218
	当連結会計年度	13,318	20		13,297
うちその他業務収益	前連結会計年度	197,519			197,519
	当連結会計年度	80,395			80,395
うちその他業務費用	前連結会計年度	67,285	16		67,301
	当連結会計年度	67,077	20		67,098

(注) 1. 「国内」とは、当行及び国内に本店を有する連結子会社（以下「国内連結子会社」という。）であります。

2. 「海外」とは、海外に本店を有する連結子会社（以下「海外連結子会社」という。）であります。

3. 「相殺消去額」には内部取引金額を記載しております。

4. 資金調達費用は金銭の信託運用見合費用を控除しております。

(3) 国内・海外別資金運用 / 調達状況

国内の資金運用勘定の平均残高は60兆4,862億円となり、主な内訳として貸出金33兆4,920億円、有価証券16兆4,134億円となりました。海外の資金運用勘定の平均残高は6,235億円となりました。また利回りは、国内で1.53%、海外で3.47%となりました。他方、国内の資金調達勘定の平均残高は60兆9,364億円となり、主な内訳として預金52兆2,171億円となりました。海外の資金調達勘定の平均残高は2,385億円となりました。また、利回りは国内で0.47%、海外で2.61%となりました。

国内・海外合算ベースで相殺消去額を控除してみますと、資金運用勘定の平均残高は60兆4,781億円、利息は9,269億円、利回りは1.53%となりました。他方、資金調達勘定の平均残高は60兆5,234億円、利息は2,725億円、利回りは0.45%となりました。

国内

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	59,374,061	782,169	1.31
	当連結会計年度	60,486,291	926,980	1.53
うち貸出金	前連結会計年度	33,523,053	570,609	1.70
	当連結会計年度	33,492,077	650,014	1.94
うち有価証券	前連結会計年度	17,542,807	136,911	0.78
	当連結会計年度	16,413,429	164,724	1.00
うちコールローン及び買入手形	前連結会計年度	2,705,096	10,146	0.37
	当連結会計年度	3,970,171	29,146	0.73
うち買現先勘定	前連結会計年度	12,355	26	0.21
	当連結会計年度	12,543	69	0.55
うち債券貸借取引支払保証金	前連結会計年度	2,143,662	6,270	0.29
	当連結会計年度	2,376,082	13,855	0.58
うち預け金	前連結会計年度	848,015	27,743	3.27
	当連結会計年度	1,267,924	29,208	2.30
資金調達勘定	前連結会計年度	59,997,947	155,026	0.25
	当連結会計年度	60,936,487	288,853	0.47
うち預金	前連結会計年度	50,623,782	79,750	0.15
	当連結会計年度	52,217,192	156,562	0.29
うち譲渡性預金	前連結会計年度	2,112,670	4,056	0.19
	当連結会計年度	1,551,770	8,234	0.53
うち債券	前連結会計年度	1,823,798	2,545	0.13
	当連結会計年度	1,260,582	3,068	0.24
うちコールマネー及び売渡手形	前連結会計年度	1,514,958	3,061	0.20
	当連結会計年度	1,768,717	8,576	0.48
うち売現先勘定	前連結会計年度	169,105	443	0.26
	当連結会計年度	110,290	567	0.51
うち債券貸借取引受入担保金	前連結会計年度	1,930,510	10,934	0.56
	当連結会計年度	2,121,532	36,018	1.69
うちコマーシャル・ペーパー	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち借入金	前連結会計年度	1,344,138	38,906	2.89
	当連結会計年度	1,249,468	39,176	3.13

(注) 1. 平均残高は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、国内連結子会社については、半年毎の残高に基づく平均残高を利用しております。

2. 「国内」とは、当行及び国内連結子会社であります。

3. 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高を、資金調達勘定は金銭の信託運用見合額の平均残高及び利息をそれぞれ控除して表示しております。

海外

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	673,162	21,889	3.25
	当連結会計年度	623,591	21,650	3.47
うち貸出金	前連結会計年度	673,162	21,889	3.25
	当連結会計年度	623,591	21,650	3.47
うち有価証券	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うちコールローン及び買入手形	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち買現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引支払保証金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち預け金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
資金調達勘定	前連結会計年度	360,826	9,044	2.50
	当連結会計年度	238,529	6,245	2.61
うち預金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち譲渡性預金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うちコールマネー及び売渡手形	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち売現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引受入担保金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うちコマースナル・ペーパー	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち借入金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			

- (注) 1. 平均残高は、半年毎の残高に基づく平均残高を利用してあります。
2. 「海外」とは、海外連結子会社であります。
3. 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高を控除して表示してあります。

合計

種類	期別	平均残高(百万円)			利息(百万円)			利回り (%)
		小計	相殺消去額 ()	合計	小計	相殺消去額 ()	合計	
資金運用勘定	前連結会計年度	60,047,224	679,461	59,367,762	804,059	21,889	782,169	1.31
	当連結会計年度	61,109,883	631,763	60,478,120	948,631	21,650	926,980	1.53
うち貸出金	前連結会計年度	34,196,216	673,162	33,523,053	592,499	21,889	570,609	1.70
	当連結会計年度	34,115,669	623,591	33,492,077	671,665	21,650	650,014	1.94
うち有価証券	前連結会計年度	17,542,807	6,299	17,536,508	136,911	0	136,911	0.78
	当連結会計年度	16,413,429	8,171	16,405,257	164,724	0	164,724	1.00
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	2,705,096		2,705,096	10,146		10,146	0.37
	当連結会計年度	3,970,171		3,970,171	29,146		29,146	0.73
うち買現先勘定	前連結会計年度	12,355		12,355	26		26	0.21
	当連結会計年度	12,543		12,543	69		69	0.55
うち債券貸借取 引支払保証金	前連結会計年度	2,143,662		2,143,662	6,270		6,270	0.29
	当連結会計年度	2,376,082		2,376,082	13,855		13,855	0.58
うち預け金	前連結会計年度	848,015		848,015	27,743		27,743	3.27
	当連結会計年度	1,267,924		1,267,924	29,208		29,208	2.30
資金調達勘定	前連結会計年度	60,358,773	713,862	59,644,911	164,071	22,507	141,563	0.23
	当連結会計年度	61,175,017	651,558	60,523,459	295,099	22,566	272,532	0.45
うち預金	前連結会計年度	50,623,782		50,623,782	79,750		79,750	0.15
	当連結会計年度	52,217,192		52,217,192	156,562		156,562	0.29
うち譲渡性預金	前連結会計年度	2,112,670		2,112,670	4,056		4,056	0.19
	当連結会計年度	1,551,770		1,551,770	8,234		8,234	0.53
うち債券	前連結会計年度	1,823,798		1,823,798	2,545		2,545	0.13
	当連結会計年度	1,260,582		1,260,582	3,068		3,068	0.24
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	1,514,958		1,514,958	3,061		3,061	0.20
	当連結会計年度	1,768,717		1,768,717	8,576		8,576	0.48
うち売現先勘定	前連結会計年度	169,105		169,105	443		443	0.26
	当連結会計年度	110,290		110,290	567		567	0.51
うち債券貸借取 引受入担保金	前連結会計年度	1,930,510		1,930,510	10,934		10,934	0.56
	当連結会計年度	2,121,532		2,121,532	36,018		36,018	1.69
うちコマーシャル・ ペーパー	前連結会計年度							
	当連結会計年度							
うち借入金	前連結会計年度	1,344,138	713,862	630,275	38,906	22,507	16,398	2.60
	当連結会計年度	1,249,468	651,558	597,909	39,176	22,566	16,609	2.77

(注) 「相殺消去額」には内部取引金額を記載しております。

(4) 国内・海外別役務取引の状況

役務取引等収益は2,700億円で、主な内訳として為替業務904億円、証券関連業務532億円、預金・債券・貸出業務353億円となりました。また、役務取引等費用は534億円で、そのうち為替業務が282億円となりました。

種類	期別	国内	海外	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
役務取引等収益	前連結会計年度	318,471	539	649	318,361
	当連結会計年度	270,144	507	586	270,064
うち預金・債券・貸出業務	前連結会計年度	47,034			47,034
	当連結会計年度	35,343			35,343
うち為替業務	前連結会計年度	89,516			89,516
	当連結会計年度	90,489			90,489
うち証券関連業務	前連結会計年度	64,984			64,984
	当連結会計年度	53,211			53,211
うち代理業務	前連結会計年度	38,004			38,004
	当連結会計年度	15,533			15,533
うち保護預り・貸金庫業務	前連結会計年度	5,808			5,808
	当連結会計年度	5,619			5,619
うち保証業務	前連結会計年度	19,611			19,611
	当連結会計年度	18,785			18,785
役務取引等費用	前連結会計年度	58,373	122	661	57,834
	当連結会計年度	53,983	84	583	53,484
うち為替業務	前連結会計年度	25,483			25,483
	当連結会計年度	28,282			28,282

(注) 1. 「国内」とは、当行及び国内連結子会社であります。

2. 「海外」とは、海外連結子会社であります。

3. 「相殺消去額」には内部取引金額を記載しております。

(5) 国内・海外別特定取引の状況

特定取引収益・費用の内訳

特定取引収益はすべて国内で1,554億円となり、主な内訳として、特定金融派生商品収益1,146億円、商品有価証券収益351億円となりました。

種類	期別	国内	海外	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
特定取引収益	前連結会計年度	75,200			75,200
	当連結会計年度	155,439			155,439
うち商品有価証券収益	前連結会計年度	42,640			42,640
	当連結会計年度	35,124			35,124
うち特定取引有価証券収益	前連結会計年度				
	当連結会計年度	454			454
うち特定金融派生商品収益	前連結会計年度	30,058			30,058
	当連結会計年度	114,698			114,698
うちその他の特定取引収益	前連結会計年度	2,502			2,502
	当連結会計年度	5,162			5,162
特定取引費用	前連結会計年度	1,187			1,187
	当連結会計年度				
うち商品有価証券費用	前連結会計年度				
	当連結会計年度				
うち特定取引有価証券費用	前連結会計年度	1,187			1,187
	当連結会計年度				
うち特定金融派生商品費用	前連結会計年度				
	当連結会計年度				
うちその他の特定取引費用	前連結会計年度				
	当連結会計年度				

(注) 1. 「国内」とは、当行及び国内連結子会社であります。

2. 「海外」とは、海外連結子会社であります。

特定取引資産・負債の内訳（未残）

特定取引資産はすべて国内で1兆7,071億円となり、主な内訳として商品有価証券5,489億円、特定金融派生商品3,480億円となりました。また、特定取引負債はすべて国内で6,495億円となり、主な内訳として売付商品債券3,691億円、特定金融派生商品2,803億円となりました。

種類	期別	国内	海外	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
特定取引資産	前連結会計年度	1,240,019			1,240,019
	当連結会計年度	1,707,155			1,707,155
うち商品有価証券	前連結会計年度	415,051			415,051
	当連結会計年度	548,909			548,909
うち商品有価証券派生商品	前連結会計年度	22			22
	当連結会計年度	8			8
うち特定取引有価証券	前連結会計年度				
	当連結会計年度				
うち特定取引有価証券派生商品	前連結会計年度	24			24
	当連結会計年度	25			25
うち特定金融派生商品	前連結会計年度	308,803			308,803
	当連結会計年度	348,009			348,009
うちその他の特定取引資産	前連結会計年度	516,118			516,118
	当連結会計年度	810,202			810,202
特定取引負債	前連結会計年度	570,870			570,870
	当連結会計年度	649,599			649,599
うち売付商品債券	前連結会計年度	339,576			339,576
	当連結会計年度	369,176			369,176
うち商品有価証券派生商品	前連結会計年度	30			30
	当連結会計年度	18			18
うち特定取引売付債券	前連結会計年度				
	当連結会計年度				
うち特定取引有価証券派生商品	前連結会計年度	10			10
	当連結会計年度	88			88
うち特定金融派生商品	前連結会計年度	231,252			231,252
	当連結会計年度	280,316			280,316
うちその他の特定取引負債	前連結会計年度				
	当連結会計年度				

(注) 1. 「国内」とは、当行及び国内連結子会社であります。

2. 「海外」とは、海外連結子会社であります。

(6) 国内・海外別預金残高の状況
預金の種類別残高(未残)

種類	期別	国内	海外	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
預金合計	前連結会計年度	53,054,306			53,054,306
	当連結会計年度	54,435,944			54,435,944
うち流動性預金	前連結会計年度	32,217,895			32,217,895
	当連結会計年度	31,362,320			31,362,320
うち定期性預金	前連結会計年度	19,009,297			19,009,297
	当連結会計年度	21,011,588			21,011,588
うちその他	前連結会計年度	1,827,113			1,827,113
	当連結会計年度	2,062,035			2,062,035
譲渡性預金	前連結会計年度	974,010			974,010
	当連結会計年度	1,327,380			1,327,380
総合計	前連結会計年度	54,028,316			54,028,316
	当連結会計年度	55,763,324			55,763,324

(注) 1. 「国内」とは、当行及び国内連結子会社であります。

2. 「海外」とは、海外連結子会社であります。

3. 預金の区分は次のとおりであります。

流動性預金 = 当座預金 + 普通預金 + 貯蓄預金 + 通知預金

定期性預金 = 定期預金 + 定期積金

(7) 国内・海外別債券残高の状況
債券の種類別残高(未残)

種類	期別	国内	海外	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
利付みずほ銀行債券	前連結会計年度	1,142,792		1,142,792
	当連結会計年度	971,953		971,953
割引みずほ銀行債券	前連結会計年度	421,573		421,573
	当連結会計年度			
合計	前連結会計年度	1,564,366		1,564,366
	当連結会計年度	971,953		971,953

(注) 1. 「国内」とは、当行及び国内連結子会社であります。

2. 「海外」とは、海外連結子会社であります。

3. 利付みずほ銀行債券には、「利付みずほ銀行債券(利子一括払)」を含んでおります。

(8) 国内・海外別貸出金残高の状況
業種別貸出状況(残高・構成比)

業種別	平成19年3月31日		平成20年3月31日	
	貸出金残高 (百万円)	構成比(%)	貸出金残高 (百万円)	構成比(%)
国内(除く特別国際金融取引勘定分)	34,005,729	100.00	33,697,901	100.00
製造業	3,083,534	9.07	3,127,278	9.28
農業	36,067	0.11	32,097	0.09
林業	1,030	0.00	859	0.00
漁業	2,003	0.01	1,798	0.01
鉱業	9,535	0.03	7,513	0.02
建設業	763,698	2.25	721,637	2.14
電気・ガス・熱供給・水道業	82,981	0.24	70,176	0.21
情報通信業	393,955	1.16	367,764	1.09
運輸業	959,558	2.82	967,058	2.87
卸売・小売業	4,097,879	12.05	3,906,800	11.59
金融・保険業	1,972,907	5.80	2,015,474	5.98
不動産業	3,566,795	10.49	3,254,249	9.66
各種サービス業	3,564,858	10.48	3,095,430	9.19
地方公共団体	292,372	0.86	327,384	0.97
政府等	3,517,130	10.34	4,164,149	12.36
その他	11,661,424	34.29	11,638,232	34.54
海外及び特別国際金融取引勘定分				
政府等				
金融機関				
その他				
合計	34,005,729		33,697,901	

(注) 1. 「国内」とは、当行及び国内連結子会社であります。

2. 「海外」とは、海外連結子会社であります。

外国政府等向け債権残高（国別）

期別	国別	外国政府等向け債権残高（百万円）
平成19年3月31日	インドネシア	770
	その他（なし）	
	合計	770
	（資産の総額に対する割合：％）	(0.00)
平成20年3月31日	対象国なし	
	（資産の総額に対する割合：％）	

（注）「外国政府等」とは、外国政府、中央銀行、政府関係機関又は国営企業及びこれらの所在する国の民間企業等であり、日本公認会計士協会銀行等監査特別委員会報告第4号に規定する特定海外債権引当勘定を計上している国の外国政府等の債権残高を掲げております。

(9) 国内・海外別有価証券の状況
有価証券残高（未残）

種類	期別	国内	海外	合計
		金額（百万円）	金額（百万円）	金額（百万円）
国債	前連結会計年度	9,788,430		9,788,430
	当連結会計年度	10,196,730		10,196,730
地方債	前連結会計年度	114,329		114,329
	当連結会計年度	91,200		91,200
社債	前連結会計年度	2,240,625		2,240,625
	当連結会計年度	2,144,704		2,144,704
株式	前連結会計年度	1,547,623		1,547,623
	当連結会計年度	1,106,209		1,106,209
その他の証券	前連結会計年度	1,366,099		1,366,099
	当連結会計年度	1,401,842		1,401,842
合計	前連結会計年度	15,057,109		15,057,109
	当連結会計年度	14,940,687		14,940,687

- （注）1．「国内」とは、当行及び国内連結子会社であります。
2．「海外」とは、海外連結子会社であります。
3．「その他の証券」には、外国債券及び外国株式を含んでおります。

(参考) 当行の単体情報のうち、参考として以下の情報を掲げております。

1. 損益状況(単体)

(1) 損益の概要

	前事業年度 (百万円) (A)	当事業年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
業務粗利益	978,525	942,836	35,689
経費(除く臨時処理分)	526,977	537,212	10,234
人件費	135,040	127,330	7,710
物件費	358,973	376,839	17,865
税金	32,962	33,042	79
業務純益(一般貸倒引当金繰入前)	451,547	405,623	45,924
一般貸倒引当金繰入額	20,463	12,096	8,367
業務純益	431,084	393,527	37,556
うち国債等債券損益	18,748	4,494	23,243
臨時損益	251,991	171,621	80,369
株式関係損益	165,097	49,066	214,163
不良債権処理額	79,418	182,802	103,384
その他	7,475	37,885	30,410
経常利益	179,092	221,905	42,812
特別損益	105,187	17,121	88,065
うち固定資産処分損益	3,303	3,668	365
うち減損損失	3,346	2,189	1,156
うち退職給付関係損益	70,658	-	70,658
うち貸倒引当金純取崩額等	34,397	15,438	18,958
うち投資損失引当金純取崩額	29	-	29
税引前当期純利益	284,280	239,027	45,253
法人税、住民税及び事業税	500	502	1
法人税等調整額	77,490	42,997	34,493
当期純利益	206,289	195,527	10,761
与信関係費用	+ + 65,484	179,460	113,975

(参考) 与信関係費用の内訳

一般貸倒引当金繰入額	20,463	12,096	8,367
貸出金償却	18,783	80,840	62,056
個別貸倒引当金繰入額	28,835	14,574	14,260
特定海外債権引当勘定繰入額	14	51	37
その他債権売却損等	2,583	72,000	74,583
合計	65,484	179,460	113,975

- (注) 1. 業務粗利益 = (資金運用収支 + 金銭の信託運用見合費用) + 役務取引等収支 + 特定取引収支 + その他業務収支
2. 業務純益 = 業務粗利益 - 経費(除く臨時処理分) - 一般貸倒引当金純繰入額
3. 「金銭の信託運用見合費用」とは、金銭の信託取得に係る資金調達費用であり、金銭の信託運用損益が臨時損益に計上されているため、業務費用から控除しているものであります。
4. 臨時損益とは、損益計算書中「その他経常収益・費用」から一般貸倒引当金純繰入額を除き、金銭の信託運用見合費用及び経費のうち臨時費用処理分等を加えたものであります。
5. 国債等債券損益 = 国債等債券売却益 - 国債等債券売却損 - 国債等債券償却 - 投資損失引当金純繰入額(債券対応分) ± 金融派生商品損益(債券関連)
6. 株式関係損益 = 株式等売却益 - 株式等売却損 - 株式等償却 - 投資損失引当金純繰入額(株式対応分) ± 金融派生商品損益(株式関連)
7. 投資損失引当金が取崩超の場合、投資損失引当金純取崩額を特別損益として計上しており、国債等債券損益・株式関係損益には投資損失引当金純繰入額は含まれません。

(2) 営業経費の内訳

	前事業年度 (百万円) (A)	当事業年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
給料・手当	126,931	133,523	6,592
退職給付費用	3,701	6,742	3,041
福利厚生費	24,750	25,449	699
減価償却費	63,725	71,923	8,197
土地建物機械賃借料	69,362	70,586	1,224
営繕費	2,480	2,526	45
消耗品費	4,998	4,911	87
給水光熱費	5,912	6,019	107
旅費	1,594	1,728	134
通信費	12,617	13,316	698
広告宣伝費	10,869	6,448	4,421
租税公課	32,962	33,042	79
その他	184,372	196,181	11,808
計	536,875	558,913	22,038

(注) 損益計算書中「営業経費」の内訳であります。

2. 利鞘（国内業務部門）（単体）

	前事業年度 （％）（A）	当事業年度 （％）（B）	増減（％） （B） - （A）
（1）資金運用利回	1.19	1.39	0.19
（イ）貸出金利回	1.62	1.86	0.23
（ロ）有価証券利回	0.65	0.73	0.07
（2）資金調達原価（含む経費）	1.01	1.21	0.19
（イ）預金債券等原価（含む経費）	1.03	1.19	0.15
預金債券等利回	0.10	0.25	0.14
（ロ）外部負債利回	0.52	0.73	0.20
（3）総資金利鞘	-	0.18	0.00
（4）預貸金利鞘	-	0.67	0.07
（5）預貸金利回差	-	1.60	0.08

（注）1. 「国内業務部門」とは、円建取引であります。

2. 「貸出金利回」は、㈱みずほフィナンシャルグループ向け貸出金を控除しております。

3. 「預金債券等」には、譲渡性預金を含んでおります。

4. 「外部負債」= コールマネー + 売現先勘定 + 売渡手形 + 借入金

3. 自己資本利益率（単体）

	前事業年度 （％）（A）	当事業年度 （％）（B）	増減（％） （B） - （A）
業務純益ベース（一般貸倒引当金繰入前）	41.2	33.1	8.0
業務純益ベース	39.1	32.0	7.1
当期純利益ベース	16.8	14.3	2.4

（注）

当期純利益等 - 普通株主に帰属しない金額（1）

自己資本利益率 = $\frac{\text{当期純利益等} - \text{普通株主に帰属しない金額}}{\{ (\text{期首株主資本および評価・換算差額等} - \text{期首発行済優先株式数} \times \text{発行価額}) + (\text{期末株主資本および評価・換算差額等} - \text{期末発行済優先株式数} \times \text{発行価額}) \}} \times 100$

（1）剰余金の配当による優先配当額等

（2）前事業年度については、旧資本の部を使用

4. 預金・債券・貸出金の状況（単体）

(1) 預金・債券・貸出金の残高

	前事業年度 （百万円）（A）	当事業年度 （百万円）（B）	増減（百万円） （B） - （A）
預金（未残）	53,118,788	54,479,674	1,360,885
預金（平残）	50,679,122	52,269,764	1,590,641
債券（未残）	1,564,366	971,953	592,413
債券（平残）	1,823,798	1,260,582	563,216
貸出金（未残）	34,065,059	33,745,801	319,257
貸出金（平残）	33,578,888	33,542,791	36,096

(2)個人・法人別預金残高(国内)

	前事業年度 (百万円)(A)	当事業年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B)-(A)
個人	30,604,912	32,034,066	1,429,153
一般法人	18,643,410	18,725,555	82,144
金融機関・政府公金	3,677,188	3,629,167	48,021
合計	52,925,511	54,388,789	1,463,277

(注) 譲渡性預金及び特別国際金融取引勘定分を含まない、本支店間未達整理前の計数です。

(3)消費者ローン残高

	前事業年度 (百万円)(A)	当事業年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B)-(A)
消費者ローン残高	11,781,591	11,807,344	25,753
うち住宅ローン残高	10,761,043	10,723,847	37,196
うち居住用住宅ローン残高	9,408,758	9,514,403	105,645
うちその他ローン残高	1,020,548	1,083,497	62,949

(4)中小企業等貸出金

		前事業年度(A)	当事業年度(B)	増減(B)-(A)
中小企業等貸出金比率	%	76.4	73.1	3.3
中小企業等貸出金残高	百万円	26,040,177	24,681,664	1,358,513

(注) 1. 貸出金残高には、特別国際金融取引勘定分は含まれておりません。

2. 「中小企業等」とは、資本金3億円(ただし、卸売業は1億円、小売業・飲食店・サービス業は5千万円)以下の会社または常用する従業員が300人(ただし、卸売業は100人、小売業・飲食店は50人、サービス業は100人)以下の会社および個人であります。

5. 債務の保証(支払承諾)の状況(単体)

支払承諾の残高内訳

種類	前事業年度		当事業年度	
	口数(件)	金額(百万円)	口数(件)	金額(百万円)
手形引受	306	2,684	263	2,615
信用状	8,093	106,433	7,396	86,247
保証	10,347	1,213,124	10,228	1,068,642
計	18,746	1,322,242	17,887	1,157,505

6. 内国為替の状況（単体）

区分		前事業年度		当事業年度	
		口数（千口）	金額（百万円）	口数（千口）	金額（百万円）
送金為替	各地へ向けた分	149,574	577,351,544	150,793	554,344,010
	各地より受けた分	173,312	582,417,697	172,523	592,850,598
代金取立	各地へ向けた分	3,102	7,827,180	2,811	11,975,546
	各地より受けた分	2,771	74,692,420	2,671	98,665,286

7. 外国為替の状況（単体）

区分		前事業年度	当事業年度
		金額（百万米ドル）	金額（百万米ドル）
仕向為替	売渡為替	81,411	102,937
	買入為替	9,045	8,900
被仕向為替	支払為替	80,775	89,356
	取立為替	5,349	5,134
合計		176,581	206,328

(自己資本比率の状況)

(参考)

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準(平成18年金融庁告示第19号。以下、「告示」という。)に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。

なお、当行は、国内基準を適用のうえ、信用リスク・アセットの算出においては基礎的内部格付手法、オペレーション・リスク相当額に係る額の算出においては粗利益配分手法を採用するとともに、マーケット・リスク規制を導入しております。

連結自己資本比率(国内基準)

項目		平成19年3月31日	平成20年3月31日
		金額(百万円)	金額(百万円)
基本的項目 (Tier 1)	資本金	650,000	650,000
	うち非累積的永久優先株(注1)	-	-
	新株式申込証拠金	-	-
	資本剰余金	762,345	762,345
	利益剰余金	386,130	418,916
	自己株式()	-	-
	自己株式申込証拠金	-	-
	社外流出予定額()	200,003	200,000
	その他有価証券の評価差損()	-	35,267
	為替換算調整勘定	9	392
	新株予約権	-	-
	連結子法人等の少数株主持分	475,742	473,552
	うち海外特別目的会社の発行する優先出資証券	417,722	425,765
	営業権相当額()	-	-
	のれん相当額()	-	9,230
	企業結合等により計上される無形固定資産相当額()	-	-
	証券化取引に伴い増加した自己資本相当額()	6,472	5,557
	期待損失額が適格引当金を上回る額の50%相当額()	-	22,749
	繰延税金資産の控除前の〔基本的項目〕計 (上記各項目の合計額)	2,067,732	2,032,401
	繰延税金資産の控除金額()(注2)	-	-
計 (A)	2,067,732	2,032,401	
うちステップ・アップ金利条項付の優先出資証券(注3)	-	82,500	
補完的項目 (Tier 2)	土地の再評価額と再評価の直前の帳簿価額の差額の45%相当額	86,487	84,462
	一般貸倒引当金	1,558	1,216
	適格引当金が期待損失額を上回る額	60,515	-
	負債性資本調達手段等	1,237,057	1,292,950
	うち永久劣後債務(注4)	457,757	356,350
	うち期限付劣後債務及び期限付優先株(注5)	779,300	936,600
	計	1,385,618	1,378,629
うち自己資本への算入額 (B)	1,385,618	1,378,629	
準補完的項目 (Tier 3)	短期劣後債務	-	-
	うち自己資本への算入額 (C)	-	-
控除項目	控除項目(注6) (D)	40,509	71,398
自己資本額	(A) + (B) + (C) - (D) (E)	3,412,842	3,339,632

項目		平成19年3月31日	平成20年3月31日
		金額(百万円)	金額(百万円)
リスク・ アセット等	資産(オン・バランス)項目	22,745,485	22,267,021
	オフ・バランス取引等項目	2,873,514	3,454,998
	信用リスク・アセットの額 (F)	25,618,999	25,722,019
	マーケット・リスク相当額に係る額((H)/8%) (G)	102,114	139,448
	(参考)マーケット・リスク相当額 (H)	8,169	11,155
	オペレーショナル・リスク相当額に係る額((J)/8%) (I)	1,986,792	2,027,368
	(参考)オペレーショナル・リスク相当額 (J)	158,943	162,189
	旧所要自己資本の額に告示に定める率を乗じて得た額が新所要自己資本の額を上回る額に25.0を乗じて得た額 (K)	1,345,703	-
	計((F)+(G)+(I)+(K)) (L)	29,053,610	27,888,836
連結自己資本比率(国内基準) = E / L × 100 (%)		11.74	11.97
(参考) Tier 1 比率 = A / L × 100 (%)		7.11	7.28

- (注) 1. 当行の資本金は株式種類毎に区分できないため、資本金のうち非累積的永久優先株の金額は記載しておりません。
2. 平成20年3月31日における「繰延税金資産の純額に相当する額」は371,563百万円であり、「繰延税金資産の算入上限額」は406,480百万円であります。
3. 告示第28条第2項に掲げるもの、すなわち、ステップ・アップ金利等の特約を付すなど償還を行う蓋然性を有する株式等(海外特別目的会社の発行する優先出資証券を含む。)であります。
4. 告示第29条第1項第3号に掲げる負債性資本調達手段で次に掲げる性質のすべてを有するものであります。
- (1) 無担保で、かつ、他の債務に劣後する払込済のものであること
- (2) 一定の場合を除き、償還されないものであること
- (3) 業務を継続しながら損失の補てんに充当されるものであること
- (4) 利払い義務の延期が認められるものであること
5. 告示第29条第1項第4号及び第5号に掲げるものであります。ただし、期限付劣後債務は契約時における償還期間が5年を超えるものに限られております。
6. 告示第31条第1項第1号から第6号に掲げるものであり、他の金融機関の資本調達手段の意図的な保有相当額、及び第2号に規定するものに対する投資に相当する額が含まれております。

単体自己資本比率（国内基準）

項目		平成19年3月31日	平成20年3月31日
		金額（百万円）	金額（百万円）
基本的項目 (Tier 1)	資本金	650,000	650,000
	うち非累積的永久優先株（注1）	-	-
	新株式申込証拠金	-	-
	資本準備金	762,345	762,345
	その他資本剰余金	-	-
	利益準備金	-	-
	その他利益剰余金	363,825	362,006
	その他	417,898	426,011
	自己株式（ ）	-	-
	自己株式申込証拠金	-	-
	社外流出予定額（ ）	200,003	200,000
	その他有価証券の評価差損（ ）	-	46,300
	新株予約権	-	-
	営業権相当額（ ）	-	-
	のれん相当額（ ）	-	-
	企業結合により計上される無形固定資産相当額（ ）	-	-
	証券化取引に伴い増加した自己資本相当額（ ）	6,472	5,557
	期待損失額が適格引当金を上回る額の50%相当額（ ）	22,274	61,309
	繰延税金資産の控除前の〔基本的項目〕計 （上記各項目の合計額）	1,965,319	1,887,195
	繰延税金資産の控除金額（ ）（注2）	-	-
計（A）	1,965,319	1,887,195	
うちステップ・アップ金利条項付の優先出資証券（注3）	-	82,500	
補完的項目 (Tier 2)	土地の再評価額と再評価の直前の帳簿価額の差額の45%相当額	86,487	84,462
	一般貸倒引当金	667	565
	適格引当金が期待損失額を上回る額	-	-
	負債性資本調達手段等	1,237,057	1,292,950
	うち永久劣後債務（注4）	457,757	356,350
	うち期限付劣後債務及び期限付優先株（注5）	779,300	936,600
	計	1,324,212	1,377,977
	うち自己資本への算入額（B）	1,324,212	1,377,977
準補完的項目 (Tier 3)	短期劣後債務	-	-
	うち自己資本への算入額（C）	-	-
控除項目	控除項目（注6）（D）	66,357	111,315
自己資本額	（A）+（B）+（C）-（D）（E）	3,223,173	3,153,857

項目		平成19年3月31日	平成20年3月31日
		金額(百万円)	金額(百万円)
リスク・ アセット等	資産(オン・バランス)項目	22,075,329	21,871,035
	オフ・バランス取引等項目	2,679,807	3,175,070
	信用リスク・アセットの額 (F)	24,755,137	25,046,106
	マーケット・リスク相当額に係る額((H) /8%) (G)	64,689	87,442
	(参考)マーケット・リスク相当額 (H)	5,175	6,995
	オペレーショナル・リスク相当額に係る額 (J)/8% (I)	1,766,412	1,802,272
	(参考)オペレーショナル・リスク相当額 (J)	141,313	144,181
	旧所要自己資本の額に告示に定める率を乗 じて得た額が新所要自己資本の額を上回る 額に25.0を乗じて得た額 (K)	-	-
	計((F)+(G)+(I)+(K)) (L)	26,586,239	26,935,820
単体自己資本比率(国内基準) = E / L × 100 (%)		12.12	11.70
(参考) Tier 1 比率 = A / L × 100 (%)		7.39	7.00

- (注) 1. 当行の資本金は株式種類毎に区分できないため、資本金のうち非累積的永久優先株の金額は記載しておりません。
2. 平成20年3月31日における「繰延税金資産に相当する額」は372,599百万円であり、「繰延税金資産の算入上限額」は377,439百万円であります。
3. 告示第40条第2項に掲げるもの、すなわち、ステップ・アップ金利等の特約を付すなど償還を行う蓋然性を有する株式等(海外特別目的会社の発行する優先出資証券を含む。)であります。
4. 告示第41条第1項第3号に掲げる負債性資本調達手段で次に掲げる性質のすべてを有するものであります。
- (1) 無担保で、かつ、他の債務に劣後する払込済のものであること
- (2) 一定の場合を除き、償還されないものであること
- (3) 業務を継続しながら損失の補てんに充当されるものであること
- (4) 利払い義務の延期が認められるものであること
5. 告示第41条第1項第4号及び第5号に掲げるものであります。ただし、期限付劣後債務は契約時における償還期間が5年を超えるものに限られております。
6. 告示第43条第1項第1号から第5号に掲げるものであり、他の金融機関の資本調達手段の意図的な保有相当額が含まれておりません。

() 優先出資証券の概要

当行では、「海外特別目的会社の発行する優先出資証券」を以下のとおり発行し、「連結自己資本比率」及び「単体自己資本比率」の「基本的項目」に計上しております。なお、Mizuho Preferred Capital (Cayman) E Limitedの発行した優先出資証券につきましては、平成20年6月30日付で全額償還する予定となっております。

発行体	Mizuho Preferred Capital (Cayman) A Limited (以下、「MPC A」といい、以下に記載される優先出資証券を「本MPC A優先出資証券」という。)	Mizuho Preferred Capital (Cayman) E Limited (以下、「MPC E」といい、以下に記載される優先出資証券を「本MPC E優先出資証券」という。)
発行証券の種類	配当非累積型永久優先出資証券	配当非累積型永久優先出資証券
償還期日	定めなし	定めなし
任意償還	平成24年6月以降の各配当支払日に任意償還可能(ただし、監督当局の事前承認が必要)	Series A、Series Bともに平成20年6月以降の各配当支払日に任意償還可能(ただし、監督当局の事前承認が必要)
配当	変動配当(ステップアップなし。下記「配当停止条件」に記載のとおり、停止された未払配当は翌期以降に累積されない。)	Series A、Series Bともに変動配当(ステップアップなし。下記「配当停止条件」に記載のとおり、停止された未払配当は翌期以降に累積されない。)
配当支払日	毎年6月の最終営業日	毎年6月の最終営業日
発行総額	636億円	Series A 676億2,000万円 Series B 550億4,000万円
払込日	平成14年2月14日	Series A 平成14年8月9日 Series B 平成14年8月30日
配当停止条件	以下の何れかの事由が発生した場合、配当の支払いは停止され、停止された配当は累積しない。 当行がMPC Aに対して損失補填事由証明書(注1)を交付した場合 当行優先株式(注2)への配当が停止された場合 当行がMPC Aに対して可処分分配可能額(注3)が存在しない旨を記載した分配可能額制限証明書(注4)を交付した場合 配当支払日が強制配当日(注5)でなく、かつ、当行がMPC Aに対して当該配当支払日に配当を一切行わないことを指示する旨の配当通知を送付した場合	以下の何れかの事由が発生した場合、配当の支払いは停止され、停止された配当は累積しない。 当行がMPC Eに対して損失補填事由証明書(注1)を交付した場合 当行優先株式(注2)への配当が停止された場合 当行がMPC Eに対して可処分分配可能額(注3)が存在しない旨を記載した分配可能額制限証明書(注4)を交付した場合 配当支払日が強制配当日(注5)でなく、かつ、当行がMPC Eに対して当該配当支払日に配当を一切行わないことを指示する旨の配当通知を送付した場合
強制配当事由	ある事業年度に対する当行普通株式の配当を実施した場合、当該事業年度が終了する暦年の6月にパリティ優先出資証券(注6)の満額の配当を実施しなければならない。ただし、損失補填事由証明書(注1)が交付されていないという条件、優先株式配当制限がそれに関して発生していないという条件(発生する場合、その範囲までの部分的な配当がなされる)及び分配可能額制限証明書(注4)がそれに関して交付されていないという条件(交付されている場合、その範囲までの部分的な配当がなされる)に服する。	ある事業年度に対する当行普通株式の配当を実施した場合、当該事業年度が終了する暦年の6月にパリティ優先出資証券(注6)の満額の配当を実施しなければならない。ただし、損失補填事由証明書(注1)が交付されていないという条件、優先株式配当制限がそれに関して発生していないという条件(発生する場合、その範囲までの部分的な配当がなされる)及び分配可能額制限証明書(注4)がそれに関して交付されていないという条件(交付されている場合、その範囲までの部分的な配当がなされる)に服する。

分配可能額制限	当行がMPCAに対して、分配可能額制限証明書（注4）を交付した場合、配当は可処分分配可能額（注3）に制限される。	当行がMPCEに対して、分配可能額制限証明書（注4）を交付した場合、配当は可処分分配可能額（注3）に制限される。
配当制限	当行優先株式（注2）への配当が減額された場合には本MPCA優先出資証券への配当も同じ割合で減額される。	当行優先株式（注2）への配当が減額された場合には本MPCE優先出資証券への配当も同じ割合で減額される。
残余財産請求権	当行優先株式（注2）と同格	当行優先株式（注2）と同格

（注）1．損失補填事由証明書

損失補填事由が発生し継続している場合に当行が各発行体に対して交付する証明書（ただし、損失補填事由が以下の 場合には、その交付は当行の裁量による）であり、損失補填事由とは、当行につき、以下の事由が発生する場合をいう。 当行によりもしくは当行に対して清算手続が開始された場合、または当行が破産した場合、もしくは当行の事業の終了を内容とする更生計画の許可がなされた場合、 会社更生法に基づく会社更生手続の開始決定、または、民事再生法に基づく民事再生手続の開始がなされた場合、 監督当局が、当行が支払不能もしくは債務超過の状態にあること、または当行を特別公的管理の対象とすることを宣言した場合もしくは第三者に譲渡する命令を発した場合、 自己資本比率または基本的項目の比率が最低水準を下回っているか、または当該配当により下回ることとなる場合、 債務不履行またはその恐れのある場合、 債務超過であるか、当該配当により債務超過となる場合。

2．当行優先株式

自己資本比率規制上の基本的項目と認められ、当行の優先株式の中で配当に関し最上位の請求権を有する優先株式。今後発行される同等の優先株式を含む。

3．可処分分配可能額

直近の事業年度の計算書類を基に算出した分配可能額から、ある事業年度において当行優先株式に対して既に支払われた配当額と今後支払われる予定配当額（ただし、ある事業年度に当行優先株式に支払われる中間配当は、可処分分配可能額の計算上含まれない。）の合計額を控除したものをいう。ただし、当行以外の会社によって発行される証券で、配当請求権、清算時における権利等が当行の財務状態及び業績を参照することにより決定され、当該発行会社に関連して、パリティ優先出資証券がMPCA（MPCEの欄についてはMPCE）との関連で有するのと同格の劣後性を有する証券（以下、「パラレル証券」という。）が存在する場合には、可処分分配可能額は以下のように調整される。調整後の可処分分配可能額 = 可処分分配可能額 × (パリティ優先出資証券の満額配当の総額) / (パリティ優先出資証券の満額配当の総額 + パラレル証券の満額配当の総額)

4．分配可能額制限証明書

可処分分配可能額が配当支払日に支払われる配当金総額を下回る場合に、当行から定時株主総会以前に発行体に交付される証明書で、当該事業年度における可処分分配可能額を記載するものをいう。

5．強制配当日

当行普通株式について配当がなされた事業年度が終了する暦年の6月の配当支払日をいう。

6．パリティ優先出資証券

MPCA（MPCEについてはMPCE）が発行し、償還期日の定めがないことや配当支払日及び払込金の用途が本MPCA優先出資証券（MPCEについては本MPCE優先出資証券。以下、本注記において同様。）と同じである優先出資証券及び本MPCA優先出資証券の総称。（たとえば、MPCEのケースでは、パリティ優先出資証券とはSeries A、Series B及び今後新たにMPCEから発行される場合に上記条件を満たす優先出資証券を含めた総称。）

優先出資証券の概要（つづき）

発行体	MHBK Capital Investment (USD) 1 Limited (以下、「BKCI(USD) 1」といい、以下に記載される優先出資証券を「本BKCI(USD) 1優先出資証券」という。)	MHBK Capital Investment (JPY) 1 Limited (以下、「BKCI(JPY) 1」といい、以下に記載される優先出資証券を「本BKCI(JPY) 1優先出資証券」という。)	MHBK Capital Investment (JPY) 2 Limited (以下、「BKCI(JPY) 2」といい、以下に記載される優先出資証券を「本BKCI(JPY) 2優先出資証券」という。)
発行証券の種類	配当非累積型永久優先出資証券	配当非累積型永久優先出資証券	配当非累積型永久優先出資証券
償還期日	定めなし	定めなし	定めなし
任意償還	平成28年6月の配当支払日を初回とし、以降5年毎の各配当支払日に任意償還可能（ただし、監督当局の事前承認が必要）	平成28年6月の配当支払日を初回とし、以降5年毎の各配当支払日に任意償還可能（ただし、監督当局の事前承認が必要）	平成30年6月の配当計算日（注14）を初回とし、以降各配当計算日（注14）に任意償還可能（ただし、監督当局の事前承認が必要）
配当	当初10年間は固定配当（ただし、平成28年6月より後に到来する配当支払日以降は変動配当が適用される。停止された未払配当は翌期以降に累積されない。）	当初10年間は固定配当（ただし、平成28年6月より後に到来する配当支払日以降は変動配当が適用される。停止された未払配当は翌期以降に累積されない。）	当初10年間は固定配当（ただし、平成30年6月より後に到来する配当計算日（注14）以降は変動配当が適用される。停止された未払配当は翌期以降に累積されない。）
配当支払日	毎年6月30日及び12月30日	毎年6月30日及び12月30日	毎年6月の最終営業日の前営業日及び12月の最終営業日（12月31日を除く。）の前営業日
発行総額	432百万米ドル	1,200億円	825億円
払込日	平成18年3月13日	平成19年1月12日	平成20年1月11日
配当停止条件	<p>（強制配当停止・減額事由）</p> <p>当行に清算事由（注7）、更生事由（注8）、支払不能事由（注9）または公的介入（注10）が生じた場合</p> <p>当行の可処分分配可能額（注11）が不足し、または当行優先株式（注12）への配当が停止もしくは減額された場合</p> <p>（任意配当停止・減額事由）</p> <p>当行の自己資本比率または基本的項目の比率が最低水準を下回っているか、または当該配当により下回ることとなり、かつ、当行がBKCI(USD) 1に対して配当停止通知を送付した場合</p> <p>当行が当行普通株式につき配当を支払わず、かつ、当行がBKCI(USD) 1に対して配当停止通知を送付した場合</p>	<p>（強制配当停止・減額事由）</p> <p>当行に清算事由（注7）、更生事由（注8）、支払不能事由（注9）または公的介入（注10）が生じた場合</p> <p>当行の可処分分配可能額（注13）が不足し、または当行優先株式（注12）への配当が停止もしくは減額された場合</p> <p>（任意配当停止・減額事由）</p> <p>当行の自己資本比率または基本的項目の比率が最低水準を下回っているか、または当該配当により下回ることとなり、かつ、当行がBKCI(JPY) 1に対して配当停止通知を送付した場合</p> <p>当行が当行普通株式につき配当を支払わず、かつ、当行がBKCI(JPY) 1に対して配当停止通知を送付した場合</p>	<p>（強制配当停止・減額事由）</p> <p>当行に清算事由（注7）、更生事由（注8）、支払不能事由（注9）または公的介入（注10）が生じた場合</p> <p>当行の可処分分配可能額（注15）が不足し、または当行優先株式（注12）への配当が停止もしくは減額された場合</p> <p>（任意配当停止・減額事由）</p> <p>当行の自己資本比率または基本的項目の比率が最低水準を下回っているか、または当該配当により下回ることとなり、かつ、当行がBKCI(JPY) 2に対して配当停止通知を送付した場合</p> <p>当行が当行普通株式につき配当を支払わず、かつ、当行がBKCI(JPY) 2に対して配当停止通知を送付した場合</p>

強制配当事由	ある事業年度に対する当行普通株式の配当を実施した場合、当該事業年度の翌事業年度中の配当支払日においては、本BKCI (USD) 1 優先出資証券に満額の配当を実施しなければならない。 ただし、強制配当停止・減額事由が発生しておらず、かつ任意配当停止・減額事由の発生に伴う配当停止通知の送付もなされていないという条件に服する。	ある事業年度中のいずれの日を基準日として当行普通株式の配当を実施した場合、当該事業年度の翌事業年度中の配当支払日においては、本BKCI (JPY) 1 優先出資証券に満額の配当を実施しなければならない。 ただし、強制配当停止・減額事由が発生しておらず、かつ任意配当停止・減額事由の発生に伴う配当停止通知の送付もなされていないという条件に服する。	ある事業年度中のいずれの日を基準日として当行普通株式の配当を実施した場合、当該事業年度の翌事業年度中の配当支払日においては、本BKCI (JPY) 2 優先出資証券に満額の配当を実施しなければならない。 ただし、強制配当停止・減額事由が発生しておらず、かつ任意配当停止・減額事由の発生に伴う配当停止通知の送付もなされていないという条件に服する。
分配可能額制限	本BKCI (USD) 1 優先出資証券の配当は、当行の可処分分配可能額（注11）の範囲で支払われる。	本BKCI (JPY) 1 優先出資証券の配当は、当行の可処分分配可能額（注13）の範囲で支払われる。	本BKCI (JPY) 2 優先出資証券の配当は、当行の可処分分配可能額（注15）の範囲で支払われる。
配当制限	当行優先株式（注12）への配当が減額された場合には本BKCI (USD) 1 優先出資証券への配当も同じ割合で減額される。	当行優先株式（注12）への配当が減額された場合には本BKCI (JPY) 1 優先出資証券への配当も同じ割合で減額される。	当行優先株式（注12）への配当が減額された場合には本BKCI (JPY) 2 優先出資証券への配当も同じ割合で減額される。
残余財産請求権	当行優先株式（注12）と同格	当行優先株式（注12）と同格	当行優先株式（注12）と同格

(注) 7. 清算事由

当行によりもしくは当行に対して清算手続が開始された場合、または当行が破産した場合、もしくは当行の事業の全部の廃止を内容とする更生計画が認可された場合。

8. 更生事由

当行につき、会社更生法に基づく会社更生手続の開始決定、または、民事再生法に基づく民事再生手続の開始がなされた場合。

9. 支払不能事由

当行につき、債務不履行もしくはその恐れのある場合、または債務超過であるか、当該配当により債務超過となる場合。

10. 公的介入

監督当局が、当行が支払不能もしくは債務超過の状態にあること、または当行を管理の対象とすることを宣言した場合もしくは第三者に譲渡する命令を発した場合。

11. 本BKCI (USD) 1 優先出資証券に関する可処分分配可能額

6月の配当可能金額

直近の事業年度の計算書類を基に算出した分配可能額から当行優先株式（注12）への配当（中間配当を除く）を控除した金額を、本BKCI (USD) 1 優先出資証券への満額配当金額と、本BKCI (USD) 1 優先出資証券の配当支払日までに配当の全部または一部が支払われ、もしくは支払う旨宣言がなされた本BKCI (USD) 1 優先出資証券と同等の劣後性を有する優先証券（同等証券）についての満額配当金額で按分した金額

12月の配当可能金額

直近の事業年度の計算書類を基に算出した分配可能額から当行優先株式（注12）への配当（中間配当を除く）を控除した金額から、6月の本BKCI (USD) 1 優先出資証券の配当支払日に支払われた本BKCI (USD) 1 優先出資証券および6月の本BKCI (USD) 1 優先出資証券の配当支払日までに支払われまたは支払う旨宣言がなされた同等証券への配当金額を控除した金額を、本BKCI (USD) 1 優先出資証券への12月の配当支払日における満額配当金額と、6月の本BKCI (USD) 1 優先出資証券への配当支払日の翌日から12月の配当支払日までに配当の全部または一部が支払われ、または支払う旨宣言がなされた同等証券についての満額配当金額で按分した金額

12. 当行優先株式

自己資本比率規制上の基本的項目と認められ、当行の優先株式の中で配当及び残余財産に関し最上位の請求権を有する優先株式。

13. 本BKCI(JPY) 1 優先出資証券に関する可処分分配可能額

6月の配当可能金額

直近の事業年度の計算書類を基に算出した分配可能額から当行優先株式(注12)への配当(中間配当を除く)を控除した金額を、本BKCI(JPY) 1 優先出資証券への満額配当金額と、本BKCI(JPY) 1 優先出資証券の配当支払日までに配当の全部または一部が支払われ、もしくは支払う旨宣言がなされた本BKCI(JPY) 1 優先出資証券と同等の劣後性を有する優先証券(同等証券)についての満額配当金額で按分した金額

12月の配当可能金額

直近の事業年度の計算書類を基に算出した分配可能額から当行優先株式(注12)への配当(中間配当を除く)を控除した金額から、6月の本BKCI(JPY) 1 優先出資証券の配当支払日に支払われた本BKCI(JPY) 1 優先出資証券および6月の本BKCI(JPY) 1 優先出資証券の配当支払日までに支払われまたは支払う旨宣言がなされた同等証券への配当金額を控除した金額を、本BKCI(JPY) 1 優先出資証券への12月の配当支払日における満額配当金額と、6月の本BKCI(JPY) 1 優先出資証券への配当支払日の翌日から12月の配当支払日までに配当の全部または一部が支払われ、または支払う旨宣言がなされた同等証券についての満額配当金額で按分した金額

14. 配当計算日

毎年6月30日及び12月30日

15. 本BKCI(JPY) 2 優先出資証券に関する可処分分配可能額

6月の配当可能金額

直近の事業年度の計算書類を基に算出した分配可能額から当行優先株式(注12)への配当(中間配当を除く)を控除した金額を、本BKCI(JPY) 2 優先出資証券への満額配当金額と、本BKCI(JPY) 2 優先出資証券の配当支払日の直後の配当計算日(注14)までに配当の全部または一部が支払われ、もしくは支払う旨宣言がなされた本BKCI(JPY) 2 優先出資証券と同等の劣後性を有する優先証券(同等証券)についての満額配当金額で按分した金額

12月の配当可能金額

直近の事業年度の計算書類を基に算出した分配可能額から当行優先株式(注12)への配当(中間配当を除く)を控除した金額から、6月の本BKCI(JPY) 2 優先出資証券の配当支払日に支払われた本BKCI(JPY) 2 優先出資証券および6月の本BKCI(JPY) 2 優先出資証券の配当支払日の直後の配当計算日(注14)までに支払われまたは支払う旨宣言がなされた同等証券への配当金額を控除した金額を、本BKCI(JPY) 2 優先出資証券への12月の配当支払日における満額配当金額と、6月の本BKCI(JPY) 2 優先出資証券への配当支払日の直後の配当計算日(注14)の翌日から12月の配当支払日の直後の配当計算日(注14)までに配当の全部または一部が支払われ、または支払う旨宣言がなされた同等証券についての満額配当金額で按分した金額

(参考)

トレーディング業務にかかるV A R (Value at Risk) は以下のとおりであります。

	前連結会計年度末 (平成19年3月31日)	当連結会計年度末 (平成20年3月31日)
(a) V A Rの範囲、前提等 ・信頼区間 ・保有期間 ・変動計測のための市場データの 標本区間	片側 (one-tailed) 99.0% 1日 1年 (265営業日264リターン)	片側 (one-tailed) 99.0% 1日 1年 (265営業日264リターン)
(b) 対象期間中のV A Rの実績 ・最大値 ・平均値	7億円 3億円	7億円 3億円

(注) V A R (Value at Risk) とは、市場の動きに対し、一定期間 (保有期間) ・一定確率 (信頼区間) のもとで保有ポートフォリオが被る可能性のある想定最大損失額で、市場リスクの量を計測する方法であります。V A Rの金額は保有期間・信頼区間の設定方法、市場の変動の計測手法 (計測モデル) によって異なります。

デリバティブ取引にかかる信用リスク相当額は以下のとおりであります。

種類	前連結会計年度末 (平成19年3月31日)	当連結会計年度末 (平成20年3月31日)
	金額 (百万円)	金額 (百万円)
金利スワップ	601,381	617,086
通貨スワップ	425,500	340,955
先物外国為替取引	756,721	630,433
金利オプション (買)	2,278	1,264
通貨オプション (買)	1,598,755	1,736,187
その他の金融派生商品	165,665	201,317
一括清算ネットティング契約による 信用リスク相当額削減効果	1,906,039	1,654,541
合計	1,644,263	1,872,703

上記は、連結自己資本比率 (国内基準) に基づく信用リスク相当額であります。

(資産の査定)

(参考)

資産の査定は、「金融機能の再生のための緊急措置に関する法律」(平成10年法律第132号)第6条に基づき、当行の貸借対照表の社債(当該社債を有する金融機関がその元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が金融商品取引法(昭和23年法律第25号)第2条第3項に規定する有価証券の私募によるものに限る。)、貸出金、外国為替、その他資産中の未収利息及び仮払金、支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに貸借対照表に注記することとされている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は質貸借契約によるものに限る。)について債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として次のとおり区分するものであります。

1. 破産更生債権及びこれらに準ずる債権

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権であります。

2. 危険債権

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権であります。

3. 要管理債権

要管理債権とは、3ヵ月以上延滞債権及び貸出条件緩和債権であります。

4. 正常債権

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、上記1から3までに掲げる債権以外のものに区分される債権であります。

資産の査定額

債権の区分	平成19年3月31日	平成20年3月31日
	金額(億円)	金額(億円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	704	996
危険債権	2,755	3,118
要管理債権	2,443	2,395
正常債権	368,384	360,059

(注) 同法律第6条第1項別紙様式に基づき、単位未満を四捨五入しております。

2【生産、受注及び販売の状況】

「生産、受注及び販売の状況」は、銀行としての業務の特殊性から該当する情報がないため、記載しておりません。

3【対処すべき課題】

当グループでは、お客さまニーズに基づき編成された三つのグローバルグループが、それぞれの特色を活かしたビジネス戦略を着実に遂行してまいります。グループ各社は、それぞれの強みを活かすと同時に相互の連携も強化し、お客さまへ最高の金融サービスを提供することで、収益力の増強に取り組んでまいります。併せて、盤石な法令遵守態勢及び高度なリスク管理態勢を構築することで、国内外のお客さまから、更に厚い信頼をいただけるよう注力してまいります。

〔ビジネス戦略〕

当行は、「我が国最強のリテールバンク」を目指して、強固な顧客基盤と強力な人材基盤を背景に、成長分野への戦略的な経営資源の投下、適切な信用リスク管理体制に基づいた貸出運営、グループ連携の更なる強化等により、強靱な収益基盤を築き、高効率なビジネスモデルを確立してまいります。具体的には、平成22年度を目処に、有人500拠点体制の構築、フィナンシャルコンサルタントの4,000名への増員、「プラネットブース」の積極展開、信託推進室による全店サポート体制の構築等により、個人のお客さまに対するコンサルティング力を強化し、預り資産の増強に努めてまいります。法人のお客さまとのお取引につきましては、与信管理体制を強化しつつ、地域・顧客セグメントにおける優位性の高いビジネス領域への経営資源再配分、研修等によるプロフェッショナルな人材の育成、グループの銀行・証券・信託銀行等との連携強化により、最高品質のソリューションを提供してまいります。

当行は、みずほフィナンシャルグループの一員として、ブランドスローガン『Channel to Discovery』に込めた、「お客さまのより良い未来の創造に貢献するフィナンシャル・パートナー」を目指し、強固な内部管理態勢のもとでビジネス戦略を着実に遂行するとともに、金融教育の支援や環境への取組といったCSR活動を推進することで、社会的責任と公共的使命を果たしつつ、企業価値の更なる向上に邁進してまいります。

4【事業等のリスク】

当行及び当グループの事業等において、投資者の投資判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項は以下の通りです。本項に含まれている将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

1. 財務面に関するリスク

(1) 不良債権処理等に係るリスク

与信関係費用の増加による追加的損失の発生

当行及び当グループは、多くの与信先についてメインバンクとなっているとともに、相当程度大口の与信先があります。また、与信先の業種については分散に努めておりますが、不動産業及び建設業、金融・保険業、卸売・小売業向けの与信の割合が相対的に高い状況にあります。

当行及び当グループは、個々の与信先の信用状態や再建計画の進捗状況を継続的にモニタリングするとともに、個別企業、企業グループや特定業種への与信集中状況等を定期的にモニタリングするポートフォリオ管理を実施しております。また、与信先から差入れを受けている担保や保証の価値についても定期的に検証しております。

しかしながら、国内外の景気動向、特定の業界における経営環境変化等によっては、想定を超える新たな不良債権の発生、メインバンク先や大口与信先の信用状態の急激な悪化、特定の業界の与信先の信用状態の悪化、担保・保証の価値下落等が生じる可能性があります。その結果、与信関係費用が増加する等追加的損失が発生し、当行及び当グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

(2) 保有資産等の価格変動に係るリスク

株価下落による追加的損失の発生

当行及び当グループは、国内上場企業の普通株式を中心に、市場性のある株式を大量に保有しております。当行及び当グループは、近年、保有株式の売却を計画的に進めており、今後も継続的な売却を計画しております。しかしながら、これらの保有株式の株価が下落した場合には評価損や売却損が発生する可能性があります。

また、当行及び当グループの自己資本比率の計算においては、株価が下落した場合には、自己資本比率が低下する可能性があります。その結果、当行及び当グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

金利の変動による追加的損失の発生

当行及び当グループは、投資等を目的として国債をはじめとする市場性のある債券等を大量に保有しているため、金利上昇に伴う価格の下落により、評価損や売却損が発生する可能性があります。また、当行及び当グループの金融資産と負債の間では満期等に違いがあるため、金利変動により損失が発生する可能性があります。当行及び当グループは、厳格なリスク管理体制のもと、必要に応じて債券の売却や銘柄の入れ替え、デリバティブ取引等によるヘッジを行う等、適切な管理を行っておりますが、金融政策の変更や市場動向により大幅に金利が上昇した場合には、当行及び当グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

外国為替相場の変動による追加的損失の発生

当行及び当グループは、資産及び負債の一部を米ドル等の外貨建てで有しております。外貨建ての資産と負債が通貨毎に同額ではなく互いに相殺されない場合には、その資産と負債の差額について、為替相場の変動により円貨換算額が変動し、評価損や実現損が発生する可能性があります。当行及び当グループでは、必要に応じ適切なヘッジを行っておりますが、予想を超える大幅な為替相場の変動が発生した場合には、当行及び当グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

保有資産の市場流動性低下による追加的損失の発生

当行及び当グループは、市場で取引される様々な資産を保有しておりますが、金融市場の混乱等により保有資産の市場流動性が著しく低下し、その結果、保有資産の価値が下落する可能性があります。平成20年3月期におきましては、米国サブプライム問題を端緒とする世界的な金融市場の混乱により、証券化商品等の市場流動性が著しく低下し、当行及び当グループにおきましても、保有証券化商品の価格下落等により損失が発生しました。このような事案を含め、保有資産の市場流動性が著しく低下した場合には、当行及び当グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

退職給付債務等の変動による追加的損失の発生

当行及び当グループの退職給付費用及び債務は、年金資産の期待運用利回りや将来の退職給付債務算出に用いる年金数理上の前提条件に基づいて算出しておりますが、金利環境の急変等により、実際の結果が前提条件と異なる場合、または前提条件に変更があった場合には、退職給付費用及び債務が増加する可能性があります。また、当行及び当グループの退職給付制度を改定した場合にも、追加的負担が発生する可能性があります。その結果、当行及び当グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

(3) 自己資本比率に係るリスク

各種リスクの顕在化や自己資本比率規制の変更による自己資本比率の低下

当行及び当グループは、事業戦略と一体となったリスクアセット運用計画、資本の効率性ならびに上記の財務面のリスクの状況等を踏まえ、適正かつ十分な水準の自己資本比率を維持することに努めておりますが、本項に示した各種リスクの顕在化や自己資本比率算出における計測手法の変更等により自己資本比率が低下する可能性があります。

また、日本の銀行の自己資本比率規制はパーゼル銀行監督委員会が設定した枠組みに基づいておりますが、当該枠組みの内容が変更された場合、もしくは金融庁による日本の銀行への規制内容が変更された場合に、その結果として自己資本比率が低下する可能性があります。

仮に当行の自己資本比率が一定基準を下回った場合には、自己資本比率の水準に応じて、金融庁から、資本の増強を含む改善計画の提出、さらには総資産の圧縮または増加の抑制、一部の業務の縮小等の是正措置を求められる可能性があります。その結果、当行及び当グループの業務運営に悪影響を及ぼす可能性があります。

(4) 格付に係るリスク

格付引き下げによる悪影響

株式会社みずほフィナンシャルグループや当行等、当グループの一部の会社は、格付機関から格付を取得しております。格付の水準は、当行及び当グループから格付機関に提供する情報のほか、格付機関が独自に収集した情報に基づいています。また、日本国債の格付や日本の金融システム全体に対する評価等の影響も受けているため、常に格付機関による見直し・停止・取下げが行われる可能性があります。

仮に格付が引き下げられた場合には、資金調達コストの上昇や資金調達の困難化、市場関連取引における追加担保の提供、既存取引の解約等が発生する可能性があります。その結果、当行及び当グループの業務運営や、業績及び財務状況に悪影響を及ぼす、ないしは株式会社みずほフィナンシャルグループの株価に悪影響を及ぼす可能性があります。

(5) 資金調達に係るリスク

資金調達が困難となることによる追加的損失の発生

当行及び当グループの資金調達は、主に預金及び債券発行に依存しておりますが、市場からの調達も行っております。当行及び当グループでは、資金調達の安定性の観点から、市場からの調達上限額の設定や資金繰りの状況に応じた対応方針の策定等、厳格な管理を行っております。

しかしながら、当行及び当グループの業績や財務状況の悪化、格付の低下や風説・風評の流布等が発生した場合、あるいは国内外の景気悪化、金融システム不安や金融市場の混乱等により資金調達市場そのものが縮小した場合には、通常より著しく高い金利による資金調達が余儀なくされる、あるいは必要な資金を市場から確保できず資金繰りが困難になる可能性があります。その結果、当行及び当グループの業務運営や、業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

2. 業務面等に関するリスク

(1) 業務面に関するリスク

業務範囲の拡大等に伴う新たなリスクの発生による悪影響

当行及び当グループは、総合金融サービスグループとして、銀行業・証券業・信託業をはじめとする様々な業務を行っております。さらに、お客さまのニーズの高度化や多様化、ないしは規制緩和の進展等に応じた新たな業務分野への進出や各種業務提携等の実施に注力しております。当行及び当グループは、こうした新たな業務等に伴って発生する種々のリスクについても適切に管理する体制を整備しております。しかしながら、想定を超えるリスクが顕在化すること等により、当行及び当グループの業務運営や、業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

法令違反等の発生による悪影響

当行及び当グループは、国内において事業活動を行う上で、会社法や独占禁止法等、会社経営に係る一般的な法令諸規制や、銀行法、金融商品取引法、信託業法等の金融関連法令諸規制の適用、さらには金融当局の監督を受けております。また、海外での事業活動については、それぞれの国や地域の法令諸規制の適用とともに金融当局の監督を受けております。

当行及び当グループは、法令諸規制が遵守されるよう、役職員に対するコンプライアンスの徹底や法務リスク管理等を行っておりますが、こうした対策が必ずしも有効に機能するとは限りません。例えば、金融商品の販売やマネーロンダリングの防止等に関連して、関係当局が一部の金融機関に対して行政処分を行う事案が発生しております。このような事案を含め、今後、仮に法令違反等が発生した場合には、行政処分やレピュテーションの毀損等により、当行及び当グループの業務運営や、業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

事務リスクの顕在化による悪影響

当行及び当グループは、幅広い金融業務において大量の事務処理を行っております。これらの多様な業務の遂行に際して、役職員により過失等に起因する不適切な事務が行われることにより、損失が発生する可能性があります。

当行及び当グループは、各業務の事務取扱を明確に定めた事務手続を制定するとともに、事務処理状況の定期的な点検を行っており、さらに本部による事務指導の強化や管理者の育成、システム化等を推進しておりますが、こうした対策が必ずしも有効に機能するとは限りません。今後、仮に重大な事務リスクが顕在化した場合には、損失の発生、行政処分、レピュテーションの毀損等により、当行及び当グループの業務運営や、業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

システムリスクの顕在化による悪影響

当行及び当グループは、勘定系・決済系等の巨大なコンピュータシステムを保有しており、国内外の拠点をはじめ、お客さまや各種決済機構等のシステムとグローバルなネットワークで接続されています。当行及び当グループは、日頃よりシステムの安定稼働の維持に努めるとともに、重要なシステムについては、原則としてバックアップを確保する等、不測の事態に備えたコンティンジェンシープランを策定しております。

しかしながら、過失、事故、ハッキング、コンピュータウィルスの発生、システムの新規開発・更新等により重大なシステム障害が発生し、こうした対策が有効に機能しない可能性があります。その場合には、業務の停止およびそれに伴う損害賠償、行政処分、レピュテーションの毀損等により、当行及び当グループの業務運営や、業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

個人情報等の漏洩等の発生による悪影響

当行及び当グループは、多数の法人・個人のお客さまの情報を保有しているほか、様々な内部情報を有しております。特に、個人情報については、近年、企業・団体が保持する個人情報の漏洩や不正なアクセスが発生するケースが多発しており、平成17年4月に全面施行された個人情報保護法の下では、より厳格な管理が要求されております。当行においても情報管理に関するポリシーや事務手続等を策定しており、役職員等に対する教育・研修等により情報管理の重要性の周知徹底、システム上のセキュリティ対策等を行っておりますが、こうした対策が必ずしも有効に機能するとは限りません。今後、仮に重要な情報が外部に漏洩した場合には、損害賠償、行政処分、レピュテーションの毀損等により、当行及び当グループの業務運営や、業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

人事上のリスクの顕在化による悪影響

当行及び当グループは、多数の従業員を雇用しており、日頃より有能な人材の確保や育成等に努めております。しかしながら、十分な人材を確保・育成できない場合には、当行及び当グループの競争力や効率性が低下し、業務運営や、業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

(2) その他のリスク

財務報告に係る内部統制の構築等に関するリスク

当グループは、ニューヨーク証券取引所上場企業として、米国サーベンス・オクスリー法に準拠した開示体制及び内部統制の構築を進めております。同法により、株式会社みずほフィナンシャルグループの経営者及び監査法人はそれぞれ同社の財務報告に係る内部統制の有効性を評価し、その評価結果を平成20年3月期のForm20-Fより報告することが求められています。

また、金融商品取引法においても、株式会社みずほフィナンシャルグループは、同社の経営者による財務報告に係る内部統制の有効性の評価及び、経営者評価に対する監査法人の意見を平成21年3月期の有価証券報告書より報告することが求められております。

当行及び当グループは、上記に従い財務報告に係る内部統制の構築を行っており、評価の過程で発見された問題は速やかに改善するべく努力しております。しかしながら、改善が間に合わない場合や、経営者が内部統制を適正と評価したとしても監査法人は不適正とする場合があり、その場合、当行及び当グループの財務報告の信頼性に悪影響を及ぼす可能性があります。

係争中の重要な訴訟

該当ありません。

リスク管理の方針及び手続が有効に機能しないリスク

当行及び当グループは、リスク管理の方針及び手続に則りリスク管理の強化に注力しております。しかしながら、急速な業務展開に伴い、リスクを特定・管理するための方針及び手続が、必ずしも有効に機能するとは限りません。また、当行及び当グループのリスク管理手法は、過去の市場動向に基づいている部分があることから、将来発生するリスクを正確に予測できるとは限りません。当行及び当グループのリスク管理の方針及び手続が有効に機能しない場合、当行の業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

米国国務省によりテロ支援国家と指定された国に所在する者との取引に関するリスク

米国法上、米国人は、イラン、キューバ、北朝鮮、スーダン、シリア等の米国国務省によりテロ支援国家と指定された国（以下、「指定国」という。）と事業を行うことが一般的に禁止されており、当行及び当グループは、関係する米国法を遵守する態勢を整備しております。但し、米国外の拠点において、関係法令の遵守を前提に、顧客による輸出入取引に伴う貿易金融、コルレス口座の維持、銀行間の市場取引等、指定国に関連する業務を限定的に行っております。指定国に係るこれらの業務は、当行及び当グループ全体の事業、業績および財政状態に比し小規模であり、また、関係する日本及び米国の法令を遵守する態勢を整備しております。

しかしながら、米国の政府機関や年金基金等の機関投資家には、イラン等の指定国と事業を行う者との取引や投資を規制する動きがあると認識しております。当行及び当グループは、そのような規制を受ける顧客や投資家を失う可能性があり、また、社会的・政治的状況によっては、指定国との関係により当行及び当グループのレピュテーションが毀損する可能性があります。その結果、当行及び当グループの事業または株式会社みずほフィナンシャルグループの株価に悪影響を及ぼす可能性があります。

3. 金融諸環境等に関するリスク

経済状況の悪化や金融市場の混乱による悪影響

当行及び当グループは、日本に主たる基盤を置く総合金融サービスグループとして、国内の各地域において事業を行っております。また、米国や欧州、アジアなどの海外諸国においても事業を行っております。日本やこれらの国、地域における経済状況が悪化した場合、あるいは、金融市場の混乱等が生じた場合には、当行及び当グループの事業の低迷や資産内容の悪化等が生じる可能性があります。例えば、平成20年3月期におきましては、米国のサブプライムローン問題を端緒とする世界的な金融市場の混乱により、当行及び当グループにおいても、保有証券化商品の価格下落等により損失が発生しました。このような事案を含め、今後、経済状況の悪化や金融市場の混乱が生じた場合には、当行及び当グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

法令諸規制の改正等による悪影響

当行及び当グループは、国内において事業活動を行う上で、会社法や独占禁止法等、会社経営に係る一般的な法令諸規制や、銀行法、金融商品取引法、信託業法等の金融関連法令諸規制の適用を受けております。また、海外での事業活動については、それぞれの国や地域の法令諸規制の適用もを受けております。これらの法令諸規制は将来において新設・変更・廃止される可能性があり、その内容によっては、商品・サービスの提供が制限される等、当行及び当グループの業務運営や、業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

金融業界の競争激化による悪影響

銀行・証券・信託等の金融業に関して、参入規制の緩和や業務範囲の拡大などの規制緩和が行われてきております。こうした規制緩和は、事業機会の拡大等を通じて当行及び当グループの経営にも好影響を及ぼす一方、他の大手金融機関、外資系金融機関、ノンバンク、ゆうちょ銀行等による新規参入や業務拡大等により、競争が激化する可能性があります。当行及び当グループが、競争に十分対応することができない場合には、当行及び当グループの業務運営や、業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

災害等の発生による悪影響

当行及び当グループは、国内外において店舗、事務所や電算センター等の施設等を保有しておりますが、このような施設等は常に地震や台風等の災害や犯罪等の発生による被害を被る可能性があります。当行及び当グループは、各種緊急事態を想定したコンティンジェンシープランを策定し、バックアップオフィスの構築等、緊急時における体制整備を行っておりますが、被害の程度によっては、当行及び当グループの業務の一部が停止する等、当行及び当グループの業務運営や、業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

風説・風評の発生による悪影響

当行及び当グループの事業は預金者等のお客さまや市場関係者からの信用に大きく依存しております。そのため、当行及び当グループや金融業界等に対する風説・風評が、マスコミ報道・市場関係者への情報伝播・インターネット上の掲示板への書き込み等により発生・拡散した場合には、お客さまや市場関係者が当行及び当グループについて事実と異なる理解・認識をされる可能性があります。当行及び当グループは、こうした風説・風評の早期発見に努めるとともに、その影響度・拡散度等の観点から適時かつ適切に対応することで、影響の極小化を図るよう努めておりますが、悪質な風説・風評が拡散した場合には、当行及び当グループの業務運営や、業績及び財務状況、ないしは株式会社みずほフィナンシャルグループの株価に悪影響を及ぼす可能性があります。

5【経営上の重要な契約等】

該当ありません。

6【研究開発活動】

該当ありません。

7【財政状態及び経営成績の分析】

平成19年度における当行及び連結子会社の財政状態及び経営成績につきましては以下の通りと分析しております。なお、本項における将来に関する事項は、有価証券報告書提出日現在において判断したものであり、今後様々な要因によって大きく異なる結果となる可能性があります。

1. 総論

みずほフィナンシャルグループの連結当期純利益は、株式関係損益の回復はあったものの、サブプライム問題を契機とする金融市場の混乱による影響を主因として、前連結会計年度比3,097億円減少し、3,112億円となりました。当行及び連結子会社につきましては以下の通りです。

(1)収益状況

連結経常収益につきましては、貸出金利回りの改善等により資金運用収益が増加したこと等により、前連結会計年度比1,321億円増加し、1兆5,649億円となりました。連結経常費用は、金利の上昇等により資金調達費用が増加したこと等から、前連結会計年度に比べ、705億円増加の1兆2,765億円となりました。この結果、連結経常利益は前連結会計年度比615億円増加の2,883億円、連結当期純利益は前連結会計年度比80億円増加の2,301億円となりました。

(2)トップライン収益の状況

金利収支の状況

資金利益は、預貸金利回差の改善等により、前連結会計年度比138億円増加の6,544億円となりました。

非金利収支の状況

役務取引等利益は、前連結会計年度比439億円減少の2,165億円となりました。

個人部門の投信・年金保険関連手数料は、下期における金融市場混乱の影響等を受け、前連結会計年度実績を下回りました。法人部門では、銀行間の競争激化等を背景に、ソリューション関連手数料等が減少しております。

2. 経営成績の分析

(1) 損益の状況

前連結会計年度及び当連結会計年度における損益状況は以下のとおりです。

(図表 1)

	前連結会計年度 (自 平成18年 4月1日 至 平成19年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成19年 4月1日 至 平成20年 3月31日)	比較
	金額 (億円)	金額 (億円)	金額 (億円)
連結粗利益	11,053	10,397	656
資金利益	6,406	6,544	138
役務取引等利益	2,605	2,165	439
特定取引利益	740	1,554	814
その他業務利益	1,302	132	1,169
営業経費	5,984	6,025	41
人件費	2,227	2,212	15
物件費	3,402	3,466	63
税金	354	347	7
不良債権処理額 (含：一般貸倒引当金繰入額)	1,195	1,855	660
株式関係損益	1,546	533	2,079
持分法による投資損益	11	9	1
その他	70	175	104
経常利益 (+ + + + +)	2,267	2,883	615
特別損益	1,061	194	867
うち貸倒引当金純取崩額等	356	165	190
税金等調整前当期純利益 (+)	3,328	3,077	251
法人税、住民税及び事業税	151	116	34
法人税等調整額	727	458	268
少数株主損益	229	201	27
当期純利益 (+ + +)	2,220	2,301	80
与信関係費用 (+ ')	839	1,689	850

*費用項目につきましては 表記としております。

連結粗利益

連結粗利益は前連結会計年度に比べ656億円減少し、1兆397億円となりました。項目ごとの収支は以下のとおりです。

資金利益

資金利益は、預貸金利回差の改善等により、前連結会計年度比138億円増加し、6,544億円となりました。

役務取引等利益

役務取引等利益は、法人部門のソリューション関連手数料の減少、個人部門の投信・年金保険関連手数料の減少等により、前連結会計年度比439億円減少し、2,165億円となりました。

特定取引利益

特定取引利益は、前連結会計年度比814億円増加し、1,554億円となりました。

その他業務利益

その他業務利益は、外国為替売買益の減少等により、前連結会計年度比1,169億円減少し、132億円となりました。

営業経費

営業経費は、トップライン収益増強のための資源投下等により、前連結会計年度比41億円増加し、6,025億円となりました。

不良債権処理額（与信関係費用）

一般貸倒引当金純繰入額を加えた不良債権処理額に、特別利益に計上した貸倒引当金純取崩額等を加算した与信関係費用は、低格付先を中心に債務者区分の見直しを行ったことや貸出債権売却に係る損失を計上したこと等により、前連結会計年度に比べ850億円増加し1,689億円となりました。内訳は、貸出金償却等の不良債権処理額が1,855億円に対し、特別利益に計上した貸倒引当金純取崩額等が165億円であります。

株式関係損益

保有株式の積極的な削減による売却益計上に加え、前連結会計年度に株式保有先のノンバンクの業績悪化に伴う減損処理を実施した特殊要因があったこと等から、前連結会計年度に比べ、2,079億円増加し533億円の利益計上になりました。

持分法による投資損益

持分法による投資損益は、前連結会計年度に比べ1億円減少し、9億円の利益計上となりました。

その他

その他は、前連結会計年度比104億円悪化し、175億円の損失となりました。

経常利益

以上の結果、経常利益は前連結会計年度比615億円増加し、2,883億円となりました。

特別損益

特別損益は、前連結会計年度に従業員に対する退職一時金または退職年金の支給に備えるために設定している退職給付信託につき、一部返還を実施した特殊要因があったこと等から、前連結会計年度比867億円減少し、194億円となりました。

税金等調整前当期純利益

以上の結果、税金等調整前当期純利益は3,077億円と、前連結会計年度に比べ251億円の減益となりました。

法人税、住民税及び事業税

法人税、住民税及び事業税は116億円となりました。

法人税等調整額

法人税等調整額は458億円となりました。

少数株主損益

少数株主損益（利益）は、前連結会計年度に比べ27億円減少し、201億円となりました。

当期純利益

以上の結果、当期純利益は2,301億円と前連結会計年度に比べ80億円の増益となりました。

- 参考 -

(図表 2) 損益状況 (単体)

	前事業年度 (自 平成18年 4月1日 至 平成19年 3月31日)	当事業年度 (自 平成19年 4月1日 至 平成20年 3月31日)	比較
	金額 (億円)	金額 (億円)	金額 (億円)
業務粗利益	9,785	9,428	356
資金利益	5,938	6,069	130
役務取引等利益	2,166	1,890	276
特定取引利益	357	1,225	868
その他業務利益	1,322	243	1,079
経費 (除く臨時処理分)	5,269	5,372	102
業務純益 (一般貸倒引当金繰入前)	4,515	4,056	459
臨時損益等	2,724	1,837	887
うち不良債権処理額	794	1,828	1,033
うち株式関係損益	1,650	490	2,141
経常利益	1,790	2,219	428
特別損益	1,051	171	880
当期純利益	2,062	1,955	107

与信関係費用	654	1,794	1,139
--------	-----	-------	-------

(2)セグメント情報

前連結会計年度及び当連結会計年度におけるセグメント情報は以下のとおりです。

なお、詳細につきましては、第5 経理の状況、1 . 連結財務諸表等、(1)連結財務諸表の(セグメント情報)に記載しております。全セグメントの経常収益の合計額及び資産の金額の合計額に占める本邦の割合が90%を超えているため、所在地別セグメント情報は記載していません。

(図表 3) 事業の種類別セグメント情報

	前連結会計年度 (自 平成18年4月1日 至 平成19年3月31日)		当連結会計年度 (自 平成19年4月1日 至 平成20年3月31日)		比較	
	金額 (億円)	構成比 (%)	金額 (億円)	構成比 (%)	金額 (億円)	構成比 (%)
銀行業	1,488	65.6	2,398	83.2	910	17.6
証券業	619	27.3	413	14.3	205	13.0
その他事業	151	6.7	82	2.9	68	3.8
計	2,258	99.6	2,894	100.4	635	0.8
消去または全社	9	0.4	10	0.4	19	0.8
経常利益	2,267	100.0	2,883	100.0	615	-

各事業の主な内容は以下のとおりであります。

銀行業.....銀行業

証券業.....証券業

その他事業.....クレジットカード業(前連結会計年度のみ)、ファクタリング業、ベンチャーキャピタル業等

3 . 財政状態の分析

前連結会計年度末及び当連結会計年度末における財政状態のうち、主なものは以下のとおりです。

(図表 4)

	前連結会計年度末 (平成19年3月31日)	当連結会計年度末 (平成20年3月31日)	比較
	金額(億円)	金額(億円)	金額(億円)
資産の部	684,365	696,988	12,622
うち有価証券	150,571	149,406	1,164
うち貸出金	340,057	336,979	3,078
負債の部	658,168	673,285	15,117
うち預金	530,543	544,359	13,816
うち譲渡性預金	9,740	13,273	3,533
うち債券	15,643	9,719	5,924
純資産の部	26,197	23,702	2,494
株主資本合計	17,984	18,312	327
評価・換算差額等合計	3,041	357	2,683
少数株主持分	5,171	5,032	138

(1) 資産の部
有価証券
(図表5)

	前連結会計年度末 (平成19年3月31日)	当連結会計年度末 (平成20年3月31日)	比較
	金額(億円)	金額(億円)	金額(億円)
有価証券	150,571	149,406	1,164
国債	97,884	101,967	4,083
地方債	1,143	912	231
社債	22,406	21,447	959
株式	15,476	11,062	4,414
その他の証券	13,660	14,018	357

有価証券は14兆9,406億円と、前連結会計年度末に比べ1,164億円減少いたしました。国債(日本国債)が4,083億円増加した一方で、株式が4,414億円減少いたしました。

貸出金
(図表6)

	前連結会計年度末 (平成19年3月31日)	当連結会計年度末 (平成20年3月31日)	比較
	金額(億円)	金額(億円)	金額(億円)
貸出金	340,057	336,979	3,078

(単体)

	前事業年度末 (平成19年3月31日)	当事業年度末 (平成20年3月31日)	比較
	金額(億円)	金額(億円)	金額(億円)
貸出金	340,650	337,458	3,192
中小企業等貸出金 *	260,401	246,816	13,585
うち居住用住宅ローン	94,087	95,144	1,056

*「中小企業等」とは、「中小企業基本法等の一部を改正する法律」(平成11年法律第146号)により、資本金3億円(ただし、卸売業は1億円、小売業・飲食店・サービス業は5千万円)以下の会社または常用する従業員300人(ただし、卸売業は100人、小売業・飲食店は50人、サービス業は100人)以下の会社および個人であります。

貸出金は33兆6,979億円と、前連結会計年度末に比べ3,078億円減少しております。

また、当行単体の貸出金残高は33兆7,458億円と前事業年度末に比べ3,192億円減少しております。

なお、当行単体の中小企業等貸出金残高は、前事業年度末に比べ1兆3,585億円減少して24兆6,816億円、うち居住用住宅ローンは、同1,056億円増加して9兆5,144億円となっております。

貸出金のうち、連結ベースのリスク管理債権額は以下のとおりです。

(図表 7)

	前連結会計年度末 (平成19年3月31日)	当連結会計年度末 (平成20年3月31日)	比較
	金額(億円)	金額(億円)	金額(億円)
破綻先債権	237	238	0
延滞債権	3,146	3,778	631
3ヵ月以上延滞債権	99	80	18
貸出条件緩和債権	2,345	2,313	32
合計	5,829	6,411	581

貸出金に対する割合(%)	1.71	1.90	0.18
--------------	------	------	------

当連結会計年度末の連結ベースのリスク管理債権残高は、延滞債権の増加を主因に前連結会計年度末と比べ581億円増加し、6,411億円となりました。その結果、貸出金に対するリスク管理債権の割合は0.18ポイント上昇し、1.90%となっております。

なお、不良債権(当行単体)に関しては、後段4で詳細を分析しております。

(2) 負債の部

預金

(図表 8)

	前連結会計年度末 (平成19年3月31日)	当連結会計年度末 (平成20年3月31日)	比較
	金額(億円)	金額(億円)	金額(億円)
預金	530,543	544,359	13,816
譲渡性預金	9,740	13,273	3,533

(単体)

	前事業年度末 (平成19年3月31日)	当事業年度末 (平成20年3月31日)	比較
	金額(億円)	金額(億円)	金額(億円)
預金	529,255	543,887	14,632
個人	306,049	320,340	14,291
一般法人	186,434	187,255	821
金融機関・政府公金	36,771	36,291	480

* 特別国際金融取引勘定分を含まない、本支店間未達勘定整理前の計数です。

預金は、定期預金の増加により、前連結会計年度末に比べ1兆3,816億円増加の54兆4,359億円となっております。譲渡性預金は1兆3,273億円と前連結会計年度末に比べ3,533億円増加しております。

なお、当行単体の預金者別預金残高は、前事業年度末に比べ個人が1兆4,291億円、一般法人が821億円増加し、金融機関・政府公金が480億円減少しております。

債券
(図表9)

	前連結会計年度末 (平成19年3月31日)	当連結会計年度末 (平成20年3月31日)	比較
	金額(億円)	金額(億円)	金額(億円)
債券	15,643	9,719	5,924
利付債券	11,427	9,719	1,708
割引債券	4,215	-	4,215

債券は9,719億円と、前連結会計年度末に比べ5,924億円減少しております。内訳では利付債券、割引債券がそれぞれ1,708億円、4,215億円減少しております。

(3) 純資産の部
(図表10)

	前連結会計年度末 (平成19年3月31日)	当連結会計年度末 (平成20年3月31日)	比較
	金額(億円)	金額(億円)	金額(億円)
純資産合計	26,197	23,702	2,494
株主資本合計	17,984	18,312	327
資本金	6,500	6,500	-
資本剰余金	7,623	7,623	-
利益剰余金	3,861	4,189	327
評価・換算差額等合計	3,041	357	2,683
その他有価証券評価差額金	2,509	528	3,037
繰延ヘッジ損益	591	215	376
土地再評価差額金	1,123	1,097	26
為替換算調整勘定	0	3	4
少数株主持分	5,171	5,032	138

当連結会計年度末の純資産合計は2兆3,702億円となりました。主な変動は以下のとおりです。

利益剰余金は、当期純利益2,301億円を計上した一方で、剰余金の配当を行ったこと等により、前連結会計年度末比327億円増加の4,189億円となりました。

その他有価証券評価差額金は、株式市況が悪化したこと等から、前連結会計年度末比3,037億円減少の528億円、少数株主持分は、同138億円減少の5,032億円となりました。

4. 不良債権に関する分析（単体）

(1) 残高に関する分析（金融再生法開示債権）

（図表11）

	前事業年度末 （平成19年3月31日）	当事業年度末 （平成20年3月31日）	比較
	金額（億円）	金額（億円）	金額（億円）
破産更生債権及びこれらに準ず る債権	703	995	292
危険債権	2,754	3,117	362
要管理債権	2,443	2,394	48
小計（要管理債権以下） (A)	5,901	6,508	606
正常債権	368,384	360,059	8,325
合計 (B)	374,285	366,567	7,718
(A) / (B) (%)	1.57	1.77	0.19

当事業年度末の不良債権残高（要管理債権以下）は、中小企業を取り巻く経営環境の悪化を踏まえ、予防的措置として、将来の環境変化に対する抵抗力が低いと想定される低格付先を中心に、保守的な自己査定を実施したこと等により、前事業年度末に比べ606億円増加し、6,508億円となりました。

(2) 保全に関する分析

前事業年度末及び当事業年度末における金融再生法開示債権（要管理債権以下）の保全及び引当の状況は、以下のとおりであります。

（図表12）

		前事業年度末 (平成19年3月31日)	当事業年度末 (平成20年3月31日)	比較
		金額（億円）	金額（億円）	金額（億円）
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	(A)	703	995	292
うち担保・保証	(B)	673	941	268
うち引当金	(C)	30	54	24
信用部分に対する引当率	$(C) / ((A) - (B))$	100.0%	100.0%	-
保全率	$((B) + (C)) / (A)$	100.0%	100.0%	-
危険債権	(A)	2,754	3,117	362
うち担保・保証	(B)	1,503	1,908	405
うち引当金	(C)	894	818	75
信用部分に対する引当率	$(C) / ((A) - (B))$	71.4%	67.6%	3.7%
保全率	$((B) + (C)) / (A)$	87.0%	87.4%	0.4%
要管理債権	(A)	2,443	2,394	48
うち担保・保証	(B)	811	722	88
うち引当金	(C)	421	397	23
信用部分に対する引当率	$(C) / ((A) - (B))$	25.8%	23.7%	2.0%
保全率	$((B) + (C)) / (A)$	50.4%	46.7%	3.6%

破産更生債権及びこれらに準ずる債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証等による回収見込額を控除した残額全額を個別貸倒引当金として計上、ないしは直接償却を実施しております。その結果、信用部分に対する引当率、保全率はともに100%となっております。

危険債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証等による回収見込額を控除した残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断して算定した金額を個別貸倒引当金等として計上しております。以上の結果、信用部分に対する引当率は3.7ポイント低下し67.6%に、保全率は0.4ポイント上昇し87.4%となっております。

要管理債権については、債権額に、今後3年間の倒産確率に基づき算定した予想損失率を乗じた金額を一般貸倒引当金として計上しております。以上の結果、信用部分に対する引当率は2.0ポイント低下し23.7%に、保全率も3.6ポイント低下し46.7%となっております。

上記債権以外の債権に対する引当率は、以下のとおりであります。

（図表13）

	前事業年度末 (平成19年3月31日)	当事業年度末 (平成20年3月31日)	比較
要管理先債権以外の要注意先債権（%）	6.21	5.87	0.33
正常先債権（%）	0.17	0.17	0.00

5. 自己資本比率に関する分析

(図表14) パーゼル 連結自己資本比率(国内基準)

	前連結会計年度末 (平成19年3月31日)	当連結会計年度末 (平成20年3月31日)	比較
	金額(億円)	金額(億円)	金額(億円)
基本的項目(Tier)	20,677	20,324	353
資本金	6,500	6,500	-
資本剰余金	7,623	7,623	-
利益剰余金	3,861	4,189	327
社外流出予定額	2,000	2,000	0
その他有価証券の評価差損	-	352	352
為替換算調整勘定	0	3	4
連結子法人等の少数株主持分	4,757	4,735	21
のれん相当額	-	92	92
証券化取引に伴い増加した自己資本相当額	64	55	9
期待損失が適格引当金を上回る額の50%相当額	-	227	227
補完的項目(Tier)	13,856	13,786	69
(うち自己資本への算入額)	(13,856)	(13,786)	(69)
土地の再評価額と再評価の直前の帳簿価額の差額の45%相当額	864	844	20
一般貸倒引当金	15	12	3
適格引当金が期待損失を上回る額	605	-	605
負債性資本調達手段等	12,370	12,929	558
控除項目	405	713	308
自己資本額(+ -)	34,128	33,396	732
リスク・アセット等	290,536	278,888	11,647
連結自己資本比率 (国内基準)(/)	11.74%	11.97%	0.23%
Tier 比率(/)	7.11%	7.28%	0.17%

連結ベースの自己資本額は、その他有価証券の評価差損を計上したこと、期待損失が適格引当金を上回ったこと等により、前連結会計年度末に比べ732億円減少し、3兆3,396億円となりました。一方、リスク・アセット等はパーゼルへの移行措置であるフロア調整額が計上されなかったこと等により、前連結会計年度末に比べ1兆1,647億円減少し、27兆8,888億円となりました。この結果、パーゼル 連結自己資本比率(国内基準)は前連結会計年度末に比べ0.23ポイント上昇し、11.97%となりました。また、Tier 比率は7.28%となっております。

- 参考 -

(図表15) バーゼル 連結自己資本比率

	前連結会計年度末 (平成19年3月31日)	当連結会計年度末 (平成20年3月31日)	比較
	金額(億円)	金額(億円)	金額(億円)
基本的項目(Tier)	20,742	20,607	134
補完的項目(Tier)*	15,404	15,913	508
控除項目	361	357	3
自己資本額(+ -)	35,785	36,163	377
リスク・アセット等	347,054	342,284	4,769
連結自己資本比率 (国内基準)(/)	10.31%	10.56%	0.25%
Tier 比率(/)	5.97%	6.02%	0.05%

*自己資本算入額